宮城学院資料室年報 ―信・望・愛―（二〇二二年度） 第28号

宮城学院資料室

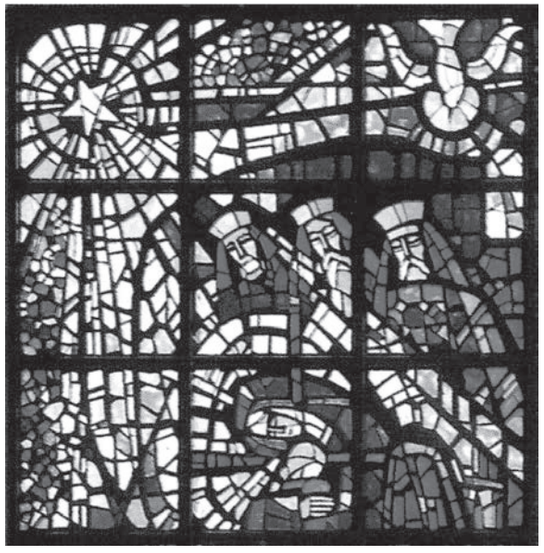
ISSN 1344-9710

宮城学院資料室年報

MIYAGI GAKUIN ARCHIVES OF HISTORY REVIEW

信　望　愛

2022年度



第28号

宮城学院資料室

宮城学院資料室年報

MIYAGI GAKUIN ARCHIVES OF HISTORY REVIEW

信　望　愛

2022 年度

第 28 号

宮城学院資料室

もくじ

□巻頭言　　資料室の使命　　佐々木哲夫…… 3

□論考…… 7

宮城学院と「初週祈祷会」―押川方義を介して―

松本　周

□論考…… 16

『橄欖』にみる「愛のある知性」

小羽田誠治

□小論 …… 29

宮城女学校の戦時期学籍簿の検討

―出身小学校の地域と保護者の職業―

佐藤 亜紀

□資料紹介…… 42

大正期の宮城女学生たち

―清水アイさんご家族ご寄贈写真から―

佐藤 亜紀

□彙報…… 59

2022（令和4）年度彙報

宮城学院資料室

〔表紙〕宮城学院礼拝堂のステンドグラス　「降誕」
ガブリエル・ロワール（1980）

巻頭言「資料室の使命」

資料室運営委員会委員長
理事長・学院長　佐々木哲夫

★

35 年ほど前、新共同訳聖書翻訳事業に携わっていた東京神学大学教授左近淑（きよし）先生が仙台東六番丁教会の小さな集まりで聖書翻訳に関する講演をされた。その中で旧約聖書研究に言及し、日本では写本発見などの本文批評的研究は困難であり、専ら『ビブリア・ヘブライカ・シュトゥットガルテンシア』（BHS）に基づく新しい解釈を提示するなどの文献学的研究になると話された。米国で 5 年間ほど旧約聖書の学びを経た後の研究について模索中だったこともあり、先生の講演は私に光明となった。爾来、キリスト教学校に奉職しつつ、BHS に基づく研究や説教に携わっている。

★★

2022 年 10 月 26 日に宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所主催の公開研究会「悲しみを語り伝えるために―旧約聖書にみる語り部の格闘―」が開催された。講師は青山学院大学教授左近豊（とむ）先生である。先生は、名前から推察されるとおり左近淑先生のご令息である。ご自身の研究に基づくご講演を頂いた。「震災直後には言葉も壊れて押し流された。…時間が経てば日常が戻り、記憶は薄れる。…失われた言葉を想像し…喪失感を表現する言葉を見つけられずにいる」などの文章を引用しながら主題を解説され、悲哀の感性を言葉に回復する事例として聖書『哀歌』を分析し紹介された。

豊先生の講演に淑先生のかつての講演を重ね合わせながら拝聴させていただいた。淑先生の岳父左近義慈（よししげ）は、東京神学大学における淑先生の修士論文指導教授であり『ヒブル語入門』の編著者である[1]。さらに義慈の実父左近義弼（よしすけ）は、青山学院大学の教授として聖書語学や旧約聖書学を講じた研究者であった。日本における旧約学研究の一系譜である。そのようなつながりを概観していた時、左近義弼に関し「1903 年 8 月 22 日に津田まつと結婚。まつは津田端・まさの三女で、宮城女学院を卒業している」との一文に遭遇した。宮城女学院とあるが、それは当時の宮城女学校であり現在の宮城学院である。津田まつの卒業に関し宮城学院資料室佐藤亜紀さんが調べた。

★★★

[1] 大野恵正「解説」『左近淑著作集第一巻学術論文集』教文館 1992 年 393 頁。左近義慈編著『ヒブル語入門』教文館 1966 年。

1899（明治 32）年宮城女学校第 7 回卒業生に津田まつの名前があった。配偶者の記録もあり当人であることが確認された[2]。記録にはカント哲学者で東北学院、明治学院、横浜共立学園につとめた笹尾条太郎の名前も見うけられる。また、同年の宮城女学校卒業生 5 名の写真も保存されていた。しかし、名前の併記がない。肖像との同定は一瞥では不可能である。

安部やす　（笹尾条太郎氏夫人）
菊地とら　（加藤輿五郎氏夫人）
小泉はる　（磯村源透氏夫人）
森　かの　（酒井勝軍氏夫人）
津田まつ　（左近義弼氏夫人）

第 7 回卒業生

[2] 『校報―私立宮城女学校―』第二号 1918（大正 7）年、34-35 頁。本稿では「左近義慈」「左近義弼」「津田まつ」は歴史的人物とし敬称略で表記した。

ところで、同期生の小泉はるは、1986 年 NHK 連続テレビ小説「はね駒（こんま）」の斉藤由貴扮する主人公橘りんのモデルになった人物である。小泉はるは、1877（明治 10）年、福島県中村町（現相馬市）に生まれた。中村高等小学校卒業後、キリスト教主義の教育を受けようと仙台に出て宮城女学校に入学する。在学中から近所の子供たちに英語を教えるなど英語力はかなりのものだった。卒業後すぐ母校の教壇に立ち 4 年間国語と音楽を教えた。退職上京し実業家磯村源透と結婚。さらに、英語力を磨くために日本女子大英文学部に入学し津田梅子らの指導を受けた。やがて報知新聞の記者となり、後に米国大統領となるタフトとの単独会見や女性日本初飛行船乗船などドラマのような活躍をした[3]。宮城女学校教員時代の写真が存在していたので小泉はるが卒業写真前列中央の人物であると判明した。残る 4 名のいずれが津田まつかである。

卒業写真の判定を左近豊先生に依頼したところ、晩年の左近義弼ご夫妻の写真が送られてきた。また、卒業写真後列右の人物が津田まつと判断される旨ご返事もいただいた。

左近義弼夫妻

1901（明治 34）年 2 月 2 日、富田氏宅にて福島伊達教会婦人会が開催された。笹尾粂太郎、ファウスト、五十嵐正、シュネーダー夫人、ファウスト夫人ら約 60 名が参加している。そこに津田まつは、宮城女学校一年制聖書専攻科で学んだ後、通訳婦人・婦人伝道者として出席し、同日付で飯坂教会に赴任している。無償にて派遣されている件につき飯坂教会より宮城女学校ワイドナー宛感謝状が贈呈されている[4]。同年 10 月 18 日夜には飯坂

[3] 「光あおいで（6）―仕事と家庭を両立ドラマ地でゆく行動派―」『河北新報』1986 年 9 月 25 日（木曜日）。

[4] 福島伊達教会百年史編集委員会『日本基督教団福島伊達教会百年史年表』1991 年 26-27 頁。

教会の村上長老宅にて植村正久の説教会が開かれている。来会者は100名程であった。その後の飯坂教会は、1903年3月に市村牧師の飯坂教会辞任を教会総会にて承認するも教会解散は否決するなど教勢困難の様相を呈している[5]。津田まつは、同年8月22日に左近義弼と結婚し、10月に夫婦で米国に帰化している。

★★★★

文献学的研究は一次資料の発掘や資料の新解釈の提示が肝要であるとの左近淑先生の講演内容が想起される。津田まつに関する今回の調査は、一次資料の発掘やその解釈などの作業を適用したものだった。

今般『宮城学院資料室年報―信望愛―』に4本の原稿が寄せられた。松本周先生「宮城学院と『初週祈祷会』―押川方義を介して―」は、日本人初のプロテスタント教会である日本基督公会成立の発端となった宣教師バラの祈祷がなされた初週祈祷会を宮城学院新年礼拝の源流とする論考である。小羽田誠治先生「『橄欖』にみる『愛のある知性』」は、宮城学院女子大学のブランド・コセンセプト「愛のある知性」が宮城女学校以来の教育に通底する理念であることを1921年に創刊された雑誌『橄欖』の作品から探り出そうと試みた論考である。佐藤亜紀氏『宮城女学校の戦時期学籍簿の検討―出身小学校の地域と保護者の職業―』は、昭和12年から16年の学籍簿に記載されている生徒の出身小学校の地域や保護者の職業の分析によって仙台の世相と宮城女学校の存立意義の関連について論考する。『大正期の宮城女学生たち―清水アイさんご家族ご寄贈写真から―』は、題目のとおり当時の写真とその裏書きを若干の解説を加えて紹介したものである。貴重な一次資料である。

宮城学院の歴史に関する調査研究や記録保存公開は、宮城学院資料室が担っている使命でもある。

[5] 同『百年史年表』33-34頁。

宮城学院と「初週祈祷会」――押川方義を介して――

松本　周

宮城学院の前身である「宮城女学校」が 136 年前に設立された。仙台の地にいかなる経緯によりキリスト教を基盤とする学校が建設されたのか。創立に重要な役割を果たした一人である押川方義の人生を辿っていくと、横浜における「初週祈祷会」の出来事へ到達する。宮城学院のキリスト教の源流ともいえる、初週祈祷会について確認し、それが歴史の中で有した意味、現在の宮城学院にとって持つ意味を考えたい。

2022 年と 150 年前の諸事

宮城学院の名称であり所在地である宮城県に関連して、日本近現代史を回顧する機会となる事柄が 2022 年に二つあった。

一つは夏の全国高等学校野球選手権大会において、深紅の大優勝旗が白河の関を越えたことである。社会的な注目度は高いといえ、高校スポーツの一種目での東北勢初優勝が日本近現代史と結びつくのは「白河の関」に込められた思いである。戊辰戦争での敗戦以後、薩長土肥を主体とする明治政府側から「白河以北一山百文」と言われたのが東北の地だったからである[1]。その意味で白河の関を越えるとは単に物理的あるいは地理的な事象としてだけではなく、日本近現代史において東北に向けられた蔑視や抑圧をはね返すといった象徴的意味をも有した。

もう一つは、宮城県 150 年を迎えたことである。「宮城県は、1872 年（明治 5 年）2 月 16 日（旧暦 1 月 8 日）、旧仙台藩を中心とする「仙台県」から改称する形で成立し、2022 年（令和 4 年）2 月 16 日に誕生 150 周年を迎えました。」[2] これは明治政府が中央集権的な行政遂行のために「県」を設置し、旧来の「藩」を廃止するという「廃藩置県」の国家政策により実施された。

そして 2022 年に 150 年を迎えた諸事を観察していくと、興味深いことに「近現代日本のかたち」とでもいった形姿が浮かび上がってくる。前述した宮城県成立にも看取され

---

[1] 宮城県の地方紙「河北新報」の題号はここに由来する。「明治維新いらい東北地方は「白河以北一山百文」と軽視されていた。河北新報は「東北振興」と「不羈独立」を社是として 1897（明治 30）年 1 月 17 日に創刊された」（毎号 1 面に掲載）。
　また、同じく 2022 年夏の選手権大会で準決勝に進出した、聖光学院高校（福島県伊達市）校歌と宮城学院とのつながりについては稿を改めて記す機会を持ちたい。

[2] 宮城県 150 周年記念特設サイト https://miyagi150th.pref.miyagi.jp/150years/ 2023.1.9 最終確認

る中央集権的な国家政策は「琉球処分」としても実行された。「一八七二年九月、王府は「維新慶賀使」派遣の要求に応えて、王族の伊江王子を正使とする使節団を東京へ派遣した。明治天皇と謁見した慶賀使一行は、その場で国王尚泰を「琉球藩王」として冊封する詔書を渡され、琉球は外務省の管轄となる。「冊封」という東アジアの伝統的な国際関係を模した形で、明治政府（天皇）と琉球（藩王）の関係性が明確化されたのである。」[3] この結果、歴史的に東アジア諸国・諸地域の結節点の役割を果たしてきた琉球から、日本の「沖縄県」へと位置づけが変わっていった。

2022 年は「鉄道 150 年」を記念した年でもある。「日本の鉄道は新橋〔現在の汐留〕～横浜〔現在の桜木町〕から始まったが、その前 1872（明治 5）年 6 月 12 日（太陽暦、以下同)、品川～横浜間で先行（仮）開業していた。この時は 1 日 2 往復（翌日から 6 往復）で途中無停車、品川発 9 時、17 時、横浜発 8 時、16 時で両駅間の所要時間は 35 分であった。……同年 10 月 14 日、晴れて新橋～横浜間が正式開業となり、翌 15 日（14 日は式典のみ）から一般営業が開始された。新橋～横浜間に 1 日 9 往復。」[4] これを端緒としてやがて日本全国に鉄道網が巡らされた現在の状況へと至ったのである。もっとも現在では全国的な鉄道ネットワークにおいて乗車人員の少ない路線の存廃が社会的課題となっている。この点についてはキリスト教の状況とも関連させつつ後述することとしたい。

そして本稿との関連で注目したい 150 年がある。2022 年 7 月 15 日に『横浜海岸教会一五〇年史』が発刊された。日本で最初に刊行されたプロテスタント教会 150 年史である。それは横浜海岸教会こそが、日本で最初に誕生したプロテスタント教会だからである。横浜海岸教会は「初週祈祷会」の出来事から誕生した。『横浜海岸教会一五〇年史』から該当部分を抜粋して引用する。「日本の正月 2 日、すなわち 1872 年 2 月 10 日の朝、塾生である篠崎桂之助が J.H. バラを訪れ、自分たちも初週祈祷会を開きたいので、正午から 1 時まで会堂を貸してほしいと言ってきた。外国人たちはもう何年も前から世界のために祈っているのだから、自分たちもこの日本のために祈りたいというのである。バラは喜んで賛成し、出席を承諾した。」[5] 一年の初頭を祈りから開始する、初週祈祷会の志がバラ塾で英語を学んでいた日本人青年たちから起こった。現在の感覚からすると初詣のキリスト教版のようなイメージが浮かぶが、日本社会で初詣が一般化するのはこれより後[6]の

---

[3] 前田勇樹「「琉球処分」の一四〇年」、前田ほか編『つながる沖縄近現代史』ボーダーインク、2021 年、28 頁。

[4] 木村嘉男「「新橋～横浜間」時刻表の変遷をたどる」『鉄道 150 年物語　旅と鉄道増刊 2022 年 10 月号』天夢人 Tenmujin 発行、2022 年、80 頁。

[5] 横浜海岸教会 150 年史編さん委員会編『横浜海岸教会一五〇年史』日本キリスト教会横浜海岸教会、2022 年、42 頁。

[6] 現在のような初詣の風習は乗車員数増による増収を目論んだ鉄道会社のキャンペーンから日本社会へ定着した。「初出は明治十八年（1885）の東京日日新聞で、川崎大師について触れたもののようだが、頻繁に使われるようになったのは明治三十年代になる」藤井青銅『「日本の伝統」の正体』新潮社、令和 3〔2021〕年、22 頁とされている。

ことであるので、時間の前後関係上その影響は考えられない。そして注目すべきは「日本のために祈りたい」との志である。個人的な事柄を祈願するのではなく、社会が激動する時代の只中で自分たちの国のために祈り、日本の将来を思う。初週祈祷会に集まった青年たちにとって「日本」が重大な関心事であり、これからこの国がどのような道を歩み、どのような形をとっていくかということが共通の課題意識であった。

この点において 150 年前に生起した諸事は偶発的同時性のようでありながら、近代日本の黎明期にあって「国を形づくる」意識という点で通底するものを看取することができる。無論、それぞれの出来事に関わった一人ひとりの社会的また実存的背景によって構想する「国」の形姿は異なり、相対立する事柄をも含んでいた。にもかかわらず「国を形づくる」ことが 1872 年当時を生きた人々に共通する時代精神であった[7]。

初週祈祷会の様子

前述のような時代背景の中で生起した初週祈祷会の様相については、植村正久が二十年後に回顧した文章に詳しい。

> 海岸基督教会は、社会の状況かくのごとくなりし最中に生まれ出でたるなり。明治三年の頃よりジェームズ・バラ氏、家塾を開きて英学を教授居られしが、その門に出入りするもの尠なからず、蓋し当時横浜は英学の中心にてありしかば、諸藩の士人、ここに集まりて多くの外人に就きて語学を修めたり。バラ氏の門に出入したる人々にして、今朝野の間に名を知らるるに至りたる官人、紳士許多あり、中にも数名の少年らは、英学を修むるの余暇、時々キリスト教の講談に耳を傾け居たり。この輩大いに感ずるところありて、明治五年正月（旧暦）バラ氏に乞うて、西洋人のなすがごとく、初週の祈祷会を開けり。これ日本国において、祈祷会を催すの初めなり。これを開くの日、バラ氏はいかなることに感じたりけん、壁上の黒板にイザヤ三十二章十五節の一句を取り、聖霊の濺がるる云々の文字を記し、使徒行伝を開講し、最も熱心にペンテコステの章を説明せり。会するものおよそ三十名、今まで祈祷の声を発することなかりし甲祈り、乙これに次ぎ、或いは泣き、或いは叫びて祈りするもの互いに前後を争うがごとくにありき。バラ氏は予て伝え聞きたるリバイバルのことを羨み、親しくその時節に遇うこともがなと希望せしことなきにあらざりしが、面りに一大リバイバルを見たる心地せりという。蓋し未だバプテスマも受けしことなく、公然祈りを

[7] 植村正久は幕末から明治への時代状況を評して「日本国を改築するの端、ここに開け、一転して国家の組織を改め、再編して廃藩置県ちょう政治上の改革となりたり。時勢は更に方向を転じて、制度の変革、工業上の進歩を見るに至れり。論理上の順序としてこの次に起こるべき革命は、心霊上に関するものにあらずして何ぞや」と述べている（植村正久「日本帝国最首のプロテスタント教会」（明治 25）『植村正久著作集 6』新教出版社、1967 年、73 頁）。

なせしことなく、その間際まではいかなる宗教思想を抱きつつあるやを知らざりし数名の少年が、俄然自ら希望してかかる有様に立ち至りしものなるをもって、その驚愕一方ならず。[8]

この文章から観察されるのは、会を包んでいる興奮と熱気である。バラによる聖書イザヤ書 32 章 15 節[9]と使徒行伝（使徒言行録）中ペンテコステ（聖霊降臨）の章（2 章）の講解がなされると、集った青年たちがそれぞれに声を発して祈り出したというのである。しかも「バプテスマも受けしことなく、公然祈りをなせしことなく」と記されているように、キリスト教洗礼を受けておらずそれゆえ当然に教会における祈りのことなど知識としては知る由もない者たちによる祈りであった[10]。加えて初週祈祷会当時は「切支丹禁制」がまだ解かれていない。1873（明治 6）年 2 月 24 日にいたって日本政府は、太政官布告第 68 号によりキリシタン禁制の高札を撤去した。キリスト教入信を可とする社会環境が整ってはじめてキリスト教信仰者が生まれたのではなく、禁教下に行われた初週祈祷会が日本最初のプロテスタント・キリスト教会設立への胎動となった。

押川方義にとっての初週祈祷会の意味

教会の存在しなかった地に教会が誕生する、いわば「無から有」の出来事が、「聖霊降臨」としての初週祈祷会を契機に生起した。そして宮城女学校創設に関わる押川方義が連なっていた。押川はキリスト教の洗礼を受け、日本基督公会（後の横浜海岸教会）設立に参与した。教会設立当日の模様は『横浜海岸教会一五〇年史』で次のように記されている。

洗礼式は、はじめに小川、仁村の両人が一人ひとりに試問し、のちに教師自らそれぞれ数個の試問をなし、生徒一同謹んで答えるという形で進められ、洗礼に及んだ。その日の受洗者は次の 9 名である。

竹尾録郎、篠崎桂乃助、安藤劉太郎（関信三の偽名で諜者）、進村（櫛部）斬、押川方義、吉田信好、佐藤一雄、戸波捨郎、大坪正之助。

この洗礼式が終わると、バラは「私が日本に来て以来、はじめての喜びであります」と言って両眼より大粒の涙を流したという。

そのあとバラは、朝の集会で長老に選ばれた小川を前に座らせ、教師ブラウンと共

8　植村「日本帝国最首のプロテスタント教会」『著作集 6』73 ～ 74 頁。
9　聖句内容は次の通り「ついに、我々の上に霊が高い天から注がれる。荒れ野は園となり園は森と見なされる。」引用は『聖書』新共同訳（日本聖書協会、1987 年）による。
10　拙論「植村正久と P. T. フォーサイスの祈祷論―日本の教会における祈り理解の問題」『ピューリタニズム研究』日本ピューリタニズム学会、2012 年、40 ～ 48 頁においては、「初週祈祷会」から始まるキリスト教的祈りの特質を植村正久の理解に沿って論じた。

に按手の礼を施して次のように語った。

「神の命を受けて今日はじめての公会を建て、小川さんを長老の官に選びました。これもまた私共の力にあらず、ひとえに神のなすことなり、ゆえにいま我、耶蘇キリストに代わり、小川さんを長老と立て彼に長老の権を授けます。あなたたち今後は何事もこの人の命令に従い和睦してこの教えを広め、外国教師の手を借りずとも道を伝えてこの国を守るよう励みたまわんことを願います。」

バラ自身は「仮牧師」となった。元来バラは「日本人の教会は日本人の手で」と考えていたが、まだ日本人で教職にある者がなかったので、日本人牧師が誕生するまでの「仮」であるとの意味をこめたのであろう。[11]

以上が押川を含む初週祈祷会からキリスト入信へ至ったメンバーの洗礼式と教会設立のなされた 3 月 10 日の様子である。なお洗礼者の中に「諜者」と注記された日本政府のいわばスパイが存在している。宣教師とそこに集まる人々の言動は諜者を通じて詳細に政府へ報告されており、同時に禁教下で記録を保存できなかったはずの教会活動について、その実態を克明に再現できるのは諜者報告書の存在による。

ところで、押川のキリスト教入信へ決定的な影響を与えたのは、宣教師バラの人格的感化と祈りの内実であった。「初週祈禱会――これはその後、一か月も続くのであるが――の中で、押川はバラの「神よ、わが日本を救い給え」という祈りを聞いた。これが押川とキリスト教との決定的な接点・出会いとなり、押川のキリスト教への回心となる」[12] と押川についての伝記に記されている。押川自身の言によれば「或る時バラー先生が祈禱の中に「吾国」と云ふ言葉を聞いた。嗚呼実に彼れの熱誠は、自国語と外国語とを混同するほどであった。自分は此の熱誠に動かされ真から心を改めた」[13] とある。ここから二つの点を指摘しておきたい。一つはバラの祈りを通して、押川における「国」理解に変革が生じたことである。先に述べたように、当時の時代精神として青年たちは「日本」という国の将来とそこに関わる自身の生き方を模索していた。その彼らにとって国と言えば「日本」であることは自明であった。けれどもバラの祈りは、押川が理解した国という前提を覆した。バラは日本のために熱心に祈って「吾国」と言う。アメリカ国籍のバラが、日本の国を我が事として自国として捉えている。そのことで押川は「真から心を改め」悔い改めたと語っている。換言すればバラにとってのアメリカ、押川にとっての日本といった国への意識が、キリスト教的超越の下に相対化され、キリスト教スピリットに基づいて各国の進路や将来を考究するという意識への転換が生じている。キリスト教伝統において重視される「主の祈り」に「御国を来たらせ給え、御心の天になるごとく地にもなさせ給え」との

[11] 『横浜海岸教会一五〇年史』45 頁。
[12] 藤一也『押川方義　そのナショナリズムを背景として』燦葉出版社、1991 年、37 頁。
[13] 藤『押川正義』39 頁、出典は『東北文学』創立満二十五年紀念特別号、明治四十四年七月と記。

言があるが、押川はバラの祈りに接することを通して、「神の国と我が国」のキリスト教的連関に人生の新しい進路を見出したのである。

もう一つの点は、押川のキリスト教入信において「国」意識が強すぎ、キリスト教の中心的使信であるイエス・キリストによる贖罪すなわち贖罪信仰が背景化してしまっているのではないか、信仰の実存的把握において希薄なのではないかという疑念である。結論的なことを先に記せば、そうした疑念ないし批判はキリスト教をめぐる現代日本社会の状況に引き付け過ぎるところに生じるもので、押川の入信に対しては当を得ていないと考えられる。繰り返し述べてきたように国の将来と自らの人生の将来とが一体化して意識されていた時代状況にあっては、国のことを考えることは何よりも真剣に実存的であったからである。さらに傍証としては先の引用で示したように、押川らの受洗にあたっては教師と信徒によるキリスト教信仰についての試問がなされ、それへの誠実な回答と誓約をふまえて洗礼式が執行された事実においても贖罪信仰が不明なままで洗礼を受けたとは考えにくい。

またこの洗礼がキリスト教禁教下であったという事実も重要である。「浦上四番崩れ」から時間的に遠くない状況下で、イエス・キリストの十字架へと復活の信仰に対する確信がないままに、キリスト教入信を命がけで決断することは不可能である。「当時、キリスト教は悪の宗教であり、とりわけ愛国心を破壊するという見方が広く行き渡っていた。そのような宗教への信仰を公にすることは、あらゆる財産と世的な希望を完全に失い、時には死の危険を伴うことも意味した。……彼らは世的な地位と栄誉の見込みか、十字架につけられたキリストの謙卑かどちらかを選択するよう求められた。しかし彼らは後者を選んだ」[14] と後年に宮城女学校や東北学院で押川と共に活動した、藤生金六は述べている。社会的な不利益や不名誉さらには死に直結しかねないキリスト教入信を支えたのは、十字架と復活のキリストへの信仰であった。むしろ押川はキリスト教信仰を狭義での個人的実存の枠内にとどめなかった。説教の筆記録で次のような内容が残されている。「霊の人とは、クリストの如き人を云ふことで、クリストの如くなるとは、世から離れるのではなく、世に行わたるのである。商売もし、事業もし、学問もし、政治もすることであるが、然し其の商売、事業、学問、政治に一身を埋めるのでなく、更に大ひなる目的を以て此等の務を尽すものである。……一事一物に執着せず、何事をするにも、一等上の大ひなる霊の心得を以てする人が即はち霊の人である。仕事に拘つらはず、習慣に拘つらはず、肉に拘つ

[14] K. Y. Fujiu, “The Yokohama Band” *The Japan Evangelist*, December,1895. pp.87-91.
藤生金六は、相馬黒光『黙移』によって広く知られるようになった宮城女学校「ストライキ」事件に関わっており、E. R. プールボーによる 1892 年の書簡の中で「藤生氏は、手紙の冒頭でこの紛争の源と言われた人物です」（『E. R. プールボー書簡集』学校法人宮城学院発行、2007 年、231 頁）と名指しで非難されている。藤生は東京・下谷教会牧師時代には田村直臣『日本の花嫁』弾劾の際の日本基督教会大会議長であった。またその後は会津伝道に従事し、若き日の野口英世に洗礼を授けている。

らはず、心の霊の為に尤も考え、心の霊の為に尤も尽力する人が即はち霊の人である。」[15] この説教は誌面掲載年からみて宮城女学校や東北学院の設立と運営の大事業をなしている押川の弁である。さらに実業界、政界で活動していく押川自身を語っているかのような言葉である。社会のどの部分で活動している時でも押川の根底にあったのは「一事一物に執着せず、何事をするにも、一等上の大ひなる霊の心得を以てする人」という姿勢であった。ここでの「霊」とは聖書に記され、キリスト教信仰における三位一体の一位格である聖霊を指している。上なる聖霊に導かれることを心得るとは、押川が若き日に経験した初週祈祷会における祈りの出来事の言語化である。そして人生で果たすべき使命についての祈りが、「一身を埋めるのでなく、更に大ひなる目的を以て此等の務を尽す」神の国建設という大目的のため calling の務めを行うこととして語られている。祈りから始まった押川のキリスト教的使命観が提示されている。

現代の私たちと「初週祈祷会」

視点を 150 年前から現代に戻して、「初週祈祷会」から現在の宮城学院に受け継がれる事柄を考えたい。年頭にあたって一同が集い聖書を開き祈るという初週祈祷会、日本プロテスタント教会の歴史冒頭にあった出来事は、現在の宮城学院にも教職員新年礼拝として受け継がれている。先に資料から確認した「初週祈祷会」の様相と宮城学院新年礼拝とを比較するならば、顕著な違いは参集者個々人による祈りの発声の有無という点にある。けれどもキリスト教信仰の本旨からすれば、祈りが有声であるか無声であるかの相違は本質的な問題ではない。一年が巡り来る毎に実施される新年礼拝が形式的年中行事ではなく、この共同体の中で自らに委ねられている務めと諸事を究極的に支えかつ高次な目的が何であるかを一年の劈頭にあたって確認する。押川の表現に依れば「一事一物に執着せず、何事をするにも、一等上の大ひなる霊の心得を以てする人が即はち霊の人である」ことを再確認するのが礼拝の場である。それは宮城学院の源流にある「初週祈祷会」と現在の宮城学院とを精神的霊的に直結させ、建学の根底にあるキリスト教の使信を確認することでもある。またそのことはキリスト教徒であるか否かに関わらず宮城学院の共同体全構成員に関わっている。なぜなら「初週祈祷会」の出来事が伝えているのは「未だバプテスマも受けしことなく、公然祈りをなせしことなく、その間際まではいかなる宗教思想を抱きつつあるやを知らざりし」者たちに祈りと志が生起した事実だからである。

---

[15] 川合道雄『武士のなったキリスト者　押川方義　管見（明治篇）』近代文藝社、1991 年、52 頁。引用部分に先立って「明治二十三年十一月十九日の「女学雑誌」（第二四一号）「霊の人の説」（安藤たね子筆記）は押川方義の説教を抜粋、掲載したものだ」と出典が記されている。同書著者・川合道雄の父が川合信水であり、東北学院に入学してから押川を師として尊敬し、交流が長く続き多くの書簡が交わされた。信水は「基督心宗教団」を設立する。その活動内容については、マーク・R・マリンズ『メイド・イン・ジャパンのキリスト教』高崎恵訳、トランスビュー、2005 年、特に 111 ～ 127 頁に詳しい。

そして「初週祈祷会」と現在を考えることは、150 年前に構想された「国のかたち」が歴史的過程や幾多の社会変動を経て、転換期が到来しているという現実を認識し、将来への方策を構想していくことでもある。150 年という節目は回顧と展望の機会でもある。このことを百年前に指摘していたのは植村正久である。「教会の五十年、鉄道の五十年」という文章で「鉄道満五十年の記念は必ずや、事実上後の進歩の機会を作り、その面目を一新する端緒となるであろう。況や教会五十年の回顧とその期間における経過の検閲とは、より深き意味において、後の進歩発達の機会を与うべきである」[16] と述べ、さらに「日本におけるキリスト教の五十年」で論を進めて、日本のキリスト教会 50 年の歴史において「機会はいかに用いられたのであるか。彼らなせしことは何であるか。なさざりしことまた何であるか。神の恩寵に照らしてこれら功罪を数え来たり、かつ感謝し、かつ悔やみて、志を立て、新たなる進歩の線路を敷きて、五十年の経験を活かすは、いわゆる恩寵の手段の最も有効なる応用であろうと信ぜられる。……吾人は時の徴候を解釈して、歴史の教訓を味わわねばならぬ」[17] と訴えた。鉄道の歴史を振り返って政府が今後の鉄道伸展と交通政策立案を開始している。鉄道にしてそうならばキリスト教会はそれ以上に、この間の歴史を批判的視点も伴って検証し、未来に向けて伝道政策を立案すべきことが語られている。

そして横浜を起点として全国へと広がった鉄道とキリスト教会は、新型コロナウィルス感染症パンデミックの影響を受け、より長期的には日本社会の少子化傾向と人口減という社会変動へ直面している。昨今様々に報道されているように、日本全国への鉄道網を担っている JR 各社は地方路線の収支悪化によって苦境に立たされている。企業体として経営構造改善のためには地方の不採算路線での設備縮小さらには廃線もやむを得ないとされる状況にあり、その場合には東北地方の鉄道路線が甚大な影響を受けることは免れ難い[18]。そして 150 年の歴史で横浜を起点として全国に路線を伸ばした鉄道と、鉄道を利用した伝道者の活動によって全国へ枝が拡げられていった教会[19] は、現在において社会状況の変化による同様の困難に直面している。各地の地方教会が過疎化・高齢化による成員減少また専従伝道者を招聘不可能な状況に向かっている。教会はこの現状と未来予測に対してどのような将来構想を提示していくのか。企業の経営的判断と類似した思考により地方の小人

---

[16] 植村正久「教会の五十年、伝道の五十年」（大正 10）『植村正久著作集 2』新教出版社、1966 年、106 頁。

[17] 植村「日本におけるキリスト教の五十年」（大正 10）『著作集 2』104 頁。

[18] 先に JR 東日本が公表した路線・区間ごとの経営情報によれば、100 円の収益を得るために要する費用金額を示す「営業係数」（100 未満であれば黒字､100 以上なら赤字）において 2020 年度に「陸羽東線鳴子～最上 22149、磐越西線野沢～津川 17706」（松本典久「とても厳しい鉄道会社の現状」『ニッポンの鉄道を応援する方法 100　旅と鉄道 2022 年 11 月号』天夢人 Tenmujin 発行、2022 年、14 頁）と東北地方の鉄道路線が不採算路線・区間の上位に位置している。

[19] 鉄道を利用したキリスト教伝道活動の歴史的エピソードについては、拙論「伝道―〈道を伝えること〉と〈道で伝えられること〉」『聖学院大学総合研究所 Newsletter』vol.19-4、2010 年、4 ～5 頁参照。

数教会を廃止し続ける対応に終始するならば、やがて広範囲な教会不存在地域が出現し、そのことはキリスト教学校とりわけ地方に存立する学校を直撃することになる。植村が鉄道と教会 50 年の歴史時点で述べたことと同様、150 年の今にあっても「機会はいかに用いられたのであるか。彼らなせしことは何であるか。なさざりしことまた何であるか」を吟味検討し、「志を立て、新たなる進歩の線路を敷」こうとする神学的かつ伝道社会学的政策の立案が求められている。

地方とりわけ東北の地にあるキリスト教学校が上述課題を考究するにあたり準拠枠となり得るのは「東北を日本のスコットランドに」という押川方義の言である。前後を含めた文脈としては「今日は色々、有益なる話を本多〔庸一〕君や服部〔綾雄〕君にきゝまして、東北に身を委ねて伝道するのは貧乏籤を引きあてたものであると云ふ事をきゝましたが何んぞ謀らん自分は、此の東北の地をして日本のスコットランドたらしむる覚悟である、決して貧乏くじとは思わない……」[20] と語っている。押川はプロテスタント・キリスト教と東北の地とが結び合わされることによって、「白河以北一山百文」的な価値観を超える新しい可能性、歴史と日本の将来へ貢献する道筋を見出し、この一言へ込めた。「スコットランド」という表現で、イギリスの「国のかたち」を日本における「国のかたち」へ応用することが考えられている。イギリスはより正確な国名としては「グレートブリテン及び北アイルランド連合王国」であり、それぞれ独自の歴史や文化を有するイングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドが連合して一つの主権国家を構成している。それになぞらえて押川は東北地域の文化的歴史的固有性を積極的に肯定的に提示し、それを通して日本という国が各地域の歴史的・文化的固有性や多様性を併せ持つ「国のかたち」を形成することを提唱した。それは近代日本政治が中央集権的で単一的な国のかたちを志向し、その結果として東北を国内植民地的な取り扱いとするのとは別様な「国のかたち」の提示であった。しかもスコットランドは宗教改革者ジョン・ノックスはじめ、プロテスタント教会の中でもとりわけ改革長老派信仰の基盤を有している。その意味で同じイギリスでも英国国教会の中心地であるイングランドとは異なる宗教文化を形成している。押川は東北の地と改革長老派キリスト教との邂逅により「此の東北の地をして日本のスコットランドたらしむる覚悟」を示した。この精神を宮城学院は継承している。「多文化共生」という現代グローバル世界共通課題を、「東北」地域の文化的歴史的固有性の学問的探求を通して社会へ発信していく。それが「初週祈祷会」において 150 年前に押川が見出した、キリスト教による新しい「国のかたち」を現代において受け継ぐことになる。

※本稿は宮城学院キリスト教講座「宮城学院の源流をたどる　初週祈祷会という出来事」（2023 年 1 月 10 日）での発表を文字化し大幅な加筆修正を加えて改題したものである。

（まつもと しゅう / 宮城学院女子大学一般教育部准教授）

[20] 藤『押川正義』300 ～ 301 頁、初出は『東北文学』創立満二十五年紀念特別号、明治四十四年七月。

『橄欖』にみる「愛のある知性」

小羽田誠治

はじめに

宮城学院女子大学では2021年度に、大学の教育理念を端的に表現するものとして、「愛のある知性を。」というタグラインが制定された。この言葉は、大学が直面する今日的な課題に対応した、どちらかと言えば未来志向の検討のもとに紡ぎ出されたものであるが、しかしながら、この言葉が指し示す内容自体は、大学のみならず宮城学院およびその前身たる宮城女学校における教育理念（の1つ）でもあったことは容易に想像される。

本稿では、そのタグラインに示されるところの「愛のある知性」なるものが、かつての教育においてどのように実践されていたのかを、これを育むべき主体である生徒たちに焦点を当てて考察するものである。より具体的には、1921年に創刊し、生徒たちの学修成果や日々の思いを綴った雑誌『橄欖』のいくつかの作品を分析することで、そこ表現された「愛のある知性」を探り出し、これを宮城学院に通底する教育理念としてあらためて確認したい。

1.「愛のある知性」とは

作品論を展開するに先立ち、そもそも「愛のある知性」とはどのようなものであるのか、検討しておく必要があるだろう。「愛のある知性」というからには、ある種の知性であるのは間違いないが、そこに冠される「愛のある」という形容の抽象度が高いため、より具体的にする必要があると思われるからである。

このタグライン「愛のある知性を。」には、ボディコピーと呼ばれる説明文が付されている。これは末光眞希学長によって作詞されたものであり、大学の思想を代表するものとして、まずもって参照するべきものである。以下にその全文を引用する。

急激に変化する世の中
これからどうなるのか
誰も答えを教えてくれない。

だからこそ、心に問いを持ちたい。
答えのない問いを問い続ける

勇気と知性を持ちたい。
明日を生きるのは私なのだから。

自分のことをもっと知りたい
あなたのことをもっと知りたい
私が問いを持つのは、
あなたと共に生きたいから。

問うことは関心
問うことは愛
それが私がここで見つけた
愛のある知性

このボディコピーに基づけば、「愛のある知性」とは以下のような知性であると言えるのではないだろうか。

(1) 自ら問いを発し、正解のないものであっても諦めずに問い続ける知性。
(2) 自分と他者を理解し、共生を求める知性。

また、宮城学院はキリスト教主義の学校であるから、「神」による愛、「神」に向かう愛も当然ながら含まれることになろう。ただし、これらの愛を単に言葉のうえでそう表現しただけでなく、十分に内在化させた知性として発現されているものを汲み取っていくこととする。

元来、豊かな広がりを持つ「愛のある知性」という言葉を、あまり杓子定規に規定するのも憚られるが、本稿ではひとまず、このような性質の知性を軸として考察を進めていきたい。

2. 田中ちゑ「きまりきった話」

まず初めに、記念すべき第 1 号の巻頭を飾ることとなった論説から見ていきたい。高等女学科 5 年生の田中ちゑ（以下、田中）による論考である。タイトルは「きまりきった話」。これはどのような内容だろうか。

なぜこのようなタイトルがつけられたかは、冒頭で以下のように述べられている[1]。

> 一體、くだらない人間にかぎつて、きまりきつた事を考へるものでして、又同時にさう云ふ人達は、くだらない言葉に馬鹿に感心して居るものです、（中略）とにかく、

[1] 『橄欖』1（1921 年 6 月）、5 頁。

下らない人間は、こんな位の事しか考へないものです。で私も、其の下らない人の例にもれず、きまりきつた事しか考へて居りません。ですから、いざ演説なぞと云つた所で、おいそれと立派な思想が出て來るわけでもないのであります。で私はやつぱりきまりきつた事を云はうと思ひます。それが私として、一番自然な事ですから。

しかし、一読すればわかるのだが、この「きまりきった話」と思しきものは、タイトルとわずか冒頭の 1 段落のみであり、このように述べた次の瞬間、田中は非常に思想性に富む芸術論を展開するのである。

田中は、芸術家が堕落していると言われていることについて、残念ながら肯定せざるを得ないと言う。当時は谷崎潤一郎らの耽美派文学が隆盛していた頃であり、おそらくはその思潮に対しての反発を示したものであろう。田中は自らの持つ芸術家像を以下のように語る[2]。

私の思ふ藝術家は、もつと高尚であり、もつと美しくあり、尊敬にあたひすべきものでなければなりません。藝術によつて向上されなければならなかつた彼等は、却つてそれによつて堕落してしまつたのであります。

そして、いかにも宮城女学校の生徒らしい精神と表現でもって、「彼等は神に捧げなければならなかつた藝術を、サタンにくれてしまつたのであります」と断罪するのである。

それでは、彼ら堕落した芸術家の作品はどういう点に問題があるというのだろうか。田中は、U 氏という作家をとりあげ、その作品を以下のように評している[3]。

もちろん氏は筆もよくまわるでせう。うれ行のよい作家でせう。ずゐ分人とちがつたものゝ見方もあるでせう。けれどそれが藝術としてどれだけのかちがあるが。それは手品師の少しく上等なのと變りないではないでせうか。なぜと云ふに、氏には創作に對する誠意がありません。眞面目さがありません。

どの作家のどの作品のどの部分をこのように論じているのか、詳細はわからない。しかし、田中が何を「芸術」と考えているかは、はっきりと示されている。即ち、いかに文章が巧く、売れ行きが良く、あるいは独特の感性を備えていても、それは芸術というよりは手品のようなものだと言うのである。田中は、鬼面人を嚇すような、あるいは商業主義やポピュリズムにつながるような作品を否定する。そして、その代わり芸術には「誠意」と

[2] 同上、6 頁。
[3] 同上。

「真面目さ」が必要だと言うのである。

「技巧」に対して「誠意」や「真面目さ」を持ち出すのは、ありふれた精神論だと言えなくもないが、田中はこれをさらに具体的かつ臨床的に説明することで、単なる精神論を脱却する[4]。

> 藝術と云ふものは、それによらなければ、それによつて自己を生しきらねば居られなくなつて、苦しみなやみぬいた後に、生れたものでなければなりません。（中略）書くまいと思つても、どうしても書かずには居られなくなつて、自己をそのまゝぶちまけた時、はじめてほんとのものが生れるのであります。要するに、藝術は手品じやありません。生む事なのです。クリエイシヨンなのです。生みの苦しみを經て、はじめて此の世に生を得た、一箇の尊い命なのであります。人間の子供と少しも變りないのであります。故に眞面目にその惱みを受け得る人でなければ眞の藝術を生む事は出來ません。

ここでは、生きることと生むこと、苦しみ悩みぬくことという人間の存在の通底するものとして芸術をとらえたうえで、「自己をそのままぶちまけた時」にそれが可能になると言う。ここに、田中が求める芸術とは、単なる学習によって修得可能な知性を超えた、人間の本質を捉え表そうと果敢に問い続ける「愛のある知性」によって創造されるべきものであるという痛切なる思いを窺い知ることができるであろう。

田中はまた、M 氏という作家をとりあげ、評価している。その評価の仕方は、「どんな小さな事にもあゝと感じ得る人です。つまらないものを見て、一大事のやうに感じて居ります」[5]というものであった。田中にとって真面目さとはつまり感受性であり、日常に対する飽くなき観察と、それを自分事としてとらえる心持ちこそが、人をして感動せしめると言うのであろう。その要点は一貫して具体的であり臨床的である。

田中はさらに「藝術は燃ゆる火であらねばならぬ」[6]と言う。この主張自体も、ありふれたものと言えなくもないが、興味深いのはここから独創性という問題に考察を進めていることである[7]。

> 他人のもやした焔のもえのこりをもつて來て、外の二三人の灰とごつちやにし、『これが私の焔のあとです。』なぞと云ふ人がありはしないかと云ふ事です。或はそれは一寸よく見えるかも知れません。けれどけつしてしつくりと人の胸に來ません。そ

[4] 同上、7 頁。
[5] 同上、8 頁。
[6] 同上。
[7] 同上、8 ～ 9 頁。

れは混合物であつて化合物でないからであります。獨創でないからであります。もちろん人から焔をわけてもらつてもいゝ、ただその焔に自分の薪を加へて、もつと熾烈な、もつと大きな、もつと色の鮮明なものとすればいゝのであります。（中略）それは一つのクリエイシヨンなのです。生みの苦しみと同様のなやみを經て來た、一つの尊い創造なのです。ですから、たとへばそれが小さな焔であつたにしてもそれは小さいながらに人の胸にひびきます。これが藝術の眞髄ではないでせうか？

言うまでもなく、この主張は先の苦しみや悩みと関連している。田中は他人とのつながりを決して否定しない。それどころか、それらを単に寄せ集めるのではなく、継承しながら自己と融合させることが重要であると言っている。他人（他者）とつながりながら、なおかつ自分の誠意を恥じずに表現することの尊さ、それを見出す田中の考察にもまた「愛のある知性」を感じ取ることができるであろう。

それでは、これらの芸術の目指すところは何か。田中の論考はそこにまで及んでいる。一言で言うと、それは「女性の解放」である。ただし、ここにもまた決して単純ではない、切実さと覚悟に満ちた考察と主張を展開しながら、クライマックスを迎えるのである[8]。

W 氏、O 氏輩の家庭小説に、ぼろ／＼涙をこぼしてるやうじや、いくら女子の解放を叫んだ所ではじまりません。先づ第一に、自分で自分を解放したらどうでせう。いくら解放せよ、解放せよと叫んだ所で、自分で立たうとしなければだめです。（中略）力の低いものは、己より力のまさつたものゝ前にはひざまづかねばなりません。ですから、といてもらつたのでは、又同時に結びつける事になると思ひます。けれど幸にも私共には解放してくれ得るものはありません。あるとすれば、それは神だけです。男性と云へども、私共女性を解放する事は出來ません。（中略）私共は、自分で自分をむすびつけた繩をたちきらねばなりません。私共には力がいります。もつとときはなす爲に力が入用です。先づ頭を養つて力をつけなければなりません。（中略）私共にうけ入れる力がありさへすれば、美しいもの、よきものを見せてくれる作家は、ずゐ分多く居るのです。

W 氏、O 氏の作品がいかなるものであるのかは知る由もないが、田中の結論をまとめるとこうなるであろう。即ち、安易な感動や感傷に浸るのではなく、自分と向き合い力をつけることでのみ、真の自立が可能となる。そして、そのためには「頭（＝知性）」を養うことが必要であり、真の芸術はそれに資するものである、ということである。田中がこ

[8] 同上、11 ～ 12 頁。

の論考で指摘することは、まさに「愛のある知性」であると言えると同時に、このような思想を持つに至った田中自身が「愛のある知性」を体現していると言えるのではないだろうか。

3. 青銀「斷想」

大部な論説の後には、文苑というカテゴリーで小品集を収載しているが、第 1 号のなかでは青銀（所属不明。以下、青銀）による「斷想」というエッセイをとりあげたい。短いエッセイなので、全文を引用して考察していこう[9]。

> 私は、一人の若い娘が、或日、薄暗い森の中を、自分の足もとをぢつと見つめながら、あつちこつち歩きながら、そつと森の中の、淋しさに云つたのを聞いた。
>
> 娘は、こんなことを云つて居た
>
> 『私は、自分の心に、誰をも觸れさせたくない、そして若し、出來るなら、柔い綠の草の上に、そつとして置いて、ただ、あの暖かい感じのする太陽の光の中で、育んで行きたい、そしたら、自分の心にみにくい事や、厭な事を見せなくともすむから、そして又恐しい事を考へて震へなくてもいゝし、悲しい苦しい秘密をもたなくてすむから、私は、秘密をもつものの、大きな喜びと、その後にどうしても負はねばならない烈しい苦痛と涙を知つているから。
>
> 私はどうしても、さう思はずには居られない、そして心と云ふものは、そんなに易く誰にでも彼にでも見せることの出來るものではないやうだ、言葉のつぎ目とか、話しの、とぎれとかに、ついと口から出る、相手の言葉にまかせて、自分の心を殘りなくいゝえ、一寸でも、開けるものではないと思はれるどうかして、私の心が、いつまでも、子供の頭に始終、動いてゐる、美しい想像の力を、今までにその子供が、覺えた、歌の曲の中に、何の技巧をもこらさずに、歌ひ現はすやうな心でほしい。』私は、ほゝえみながら、聞いて居たが、やがて、眞劍になつてその娘の唇をみつめて居た。

場面設定としては、青銀が森のなかで出会った――というより見かけた――1 人の少女が発した独り言を聞いた、ということのようである。が、これほど長い独り言を、他人にこれほど明瞭に聴き取れるほどしっかりと発する少女がいるとも、また青銀がそれを記憶しているとも考えられない――あるいは何かに記録した様子もない――ので、作品の大部分を占めるこの“独り言”は青銀の心情を表したものと考えるのが妥当だろう。

そのうえで、発されている言葉の内容であるが、冒頭では「自分の心に、誰をも觸れさせたくない」と、心を閉ざそうとしている。一見すると、青銀は他者との関わりを遮断し

[9] 同上、26 ～ 27 頁。

ようとしているようでもある。

しかしながら、そこには他者との関係を真摯に問い続ける苦悩がある。まず「自分の心にみにくい事」を認識する知性を持つ。そして、秘密についても興味深い見解を示している。即ち、秘密を持つことに対して「大きな喜びと、その後にどうしても負はねばならない烈しい苦痛と涙」があるというのである。他者と関わるがゆえに秘密が生まれ、それが喜びと苦痛をもたらす。これは他者を軽んじている限りは持ちようのない感覚であり、他者に対して誠実であろうと努めた結果を表していると言えるのではないか。

また、「心と云ふものは、そんなに易く誰にでも彼にでも見せることの出來るものではない」という言葉も、そのあとに続く「どうかして、私の心が、（中略）何の技巧をもこらさずに、歌ひ現はすやうな心でほしい」という願いに表されるように、決して諦めやニヒリズムから来るものではなく、他者との関わりを求めつつその限界を知る真摯な態度によるものである。だからこそ、青銀は「眞劍になつて」いたのである。

こうした自己理解・人間理解と他者への誠実な態度もまた、「愛のある知性」が表されたものであると考えられる。

4. 増子わくり「ベツレヘムの星」

次に、第 2 号の論説を見ていきたい。聖書専攻科 2 年生の増子わくり（以下、増子）による論考である。タイトルの意味については今さら説明するまでもあるまい。いかにも敬虔な信者であることを窺わせるこのタイトルがなぜつけられたかは、冒頭において増子自身が自らの体験を回想する形で語っているので、まずはそこから始めよう[10]。

> 「神我を愛し給ふ」……七年前の昔忍にしの絲に導かれて西より南より東より北より赤い煉瓦造りの學校を指して集つて來た我等はバイブルの一文字さへわきまへず、もとより我等の上に絶えざる神の惠いやまし加へられつゝある事をば知るによしもなかつた。夢の間に一日一日の歩みは過ぎ行き、遂に今日に至つた今七年間の惠まれし過去の日をかへり見て、無量の感慨に打たれるのである。

増子は宮城女学校で 7 年間過ごしたようだが、入学時にはキリスト教についてほぼ全く知らなかったことがわかる。であれば、宮城女学校との出会いはまさに増子の運命を変えるものだったと言っても過言ではあるまい。そして、ついには聖書専攻科にまで進むこととなったほどの、その 7 年間のキリスト教からの学びを次のように総括する[11]。

---

[10] 『橄欖』2（1922 年 4 月）、11 頁。
[11] 同上、11 ～ 12 頁。

七年後の今靜かに去りし日のあとをたどる時、只感謝と歡びに充たさる。すでに之等の長き日の間に自分達の心々にはとう／＼美しい尊い或る物がしつかと植ゑつけられてしまつた。愛する事を知つた、人をねぎろうことを知つた、敗者の友たるべき事を知つた、造り主の愛と、造られし者の罪を知つた、人間の使命を知つた、幼き者の魂の尊さを知つた、而して慘ましき十字架上よりさして來る惠みの光りを始めて受くることが出來る樣になつた。」[12] それ等のすべてが尊くなくて何であらう。罪深き我が身をさへ神はかく愛し給ふのである。

神による愛、人間としての愛、それらを知ったと直截に語る増子が宮城女学校から得たものは、いかなる形であれ、「愛のある知性」と呼ぶにふさわしい。とはいえ、それがどのようなものであったのか、以下にはより個別具体的な姿を見て行きたい。

増子はまず、愛するとはどういうことかをおぼろげながら知ることができたと言い、以下のように語る[13]。

温き天父のみふところより此の現世に下り給ふた主は先づ第一に愛を完成せんが爲めに多くの友より、多くの人々より責められ給ふた。主が天父を愛し給へば愛し給ふ程ます／＼呪の聲は大きかつた。それは愛の實行は却つて人々の反抗を招いたからである。（中略）愛することは苦痛である。愛することは大いなる苦しみの犧牲でなければならぬ。神を愛することは、主を愛することは同胞を愛することである。十字架をつけよと罵り叫ぶ敵をも赦すことである。

増子は第一に、敵をも愛し、責めに耐え忍び、赦すことに愛を見る。そして、そのような理解を遠い過去の出来事のみに終わらせていないことも、特筆すべきである[14]。

有名なK氏の働きは凡人には出來ない。人間の怖ろしい裏面をのみ見せつけられて尙ほあれまでに命を捧げて貧しさのどん底に落とされた人々の爲めにやゝもすれば猛りやすい荒んでる人々のために働いて居らるゝことは眞に愛なくしては一日も出來ないことである。愛の力はこゝにある。のゝしられても苦しめられてもなほ信ずる所を眞つ直ぐに行なつて行かれるK氏、幾度欺かれてもより深い信仰と愛とを以て彼等のために命を犧牲にてしいらつしやることに對して感ぜぬ人があらうか。まこと愛は理屈ではない。我等凡人は体驗なしに之を知る事は出來ない。友よ、愛の尊さ、偉大さ、深さを知れ。

---

12 」は原文ママ。
13 同上、12 ～ 13 頁。
14 同上、13 頁。

ところで、このK氏というのは、後述するように増子が『出家とその弟子』を取り上げていることから、倉田百三のことを指すものと推定される。倉田百三は幼少時から親鸞に傾倒しながらも、青年期にはキリスト教の影響も受けていたことで知られる。こうした宗教活動家を現実世界に見出し、理念として学んだ愛をそこに当てはめ、敬愛し、さらには自己を顧みようとする態度は、その教えをいかに自分のものにしているかを如実に示すものであろう。

K氏に言及する部分はもう1ヵ所あり、そこでは増子の理解する愛についての別の側面が論じられている[15]。

> 主によりて示された愛のために我等は漸くにして再び弱者の友たるべきを知つたのである。主はいつも貧しき者、病める者、よわき者、無智なる者、罪深き者の友で在したことはバイブルの明らかに示す所である。

ここで増子は、イエスやキリスト教がいわゆる社会的弱者を救うことを使命としていることを聖書から学ぶ。そして、この点についてイエスの事績を紹介しながら論じたあと、以下のように続ける[16]。

> K氏が此世の中に底の底まで行けば決して惡人といふ者が居ないものである、と云ふて居らるゝが實にうなづかれることである。あの想像もつかない程暗い貧民窟の生活の中にさへ彼は人の心の尊さを感じて居らるゝのである。（中略）「出家と其弟子」に表はれて居る人々の心でも、シユクスピーアの作に出て來るどんな人々の心でも善である如く其他如何なる作者によつて表はされて居る人々の心でも美しくある如く、何づれの人の心にも神秘に近い尊さのあることを知り、それを自分も成長させ、又人にも助けを與ふることが特に我等に大切なことである。こゝから本當の意味の人格尊重といふものも生まれて來るものである樣に思はれる。我等あくまで弱き者の友たらんことを切望し祈るべきである。

どのような人間であれ善なる心を持っているという信念に基づいて生きるK氏に学び、その神髄に到達するために自身が何をするべきか、ということにおいて、ただならぬ覚悟が語られているのである。この精神にもやはり、自らの信念に向かって問い続け、自己と他者を尊重しながら共生を追い求める「愛のある知性」が表されていることは疑いない。

以上、聖書と現実を往復しながら自らの愛に対する理解を深め、これを会得しようとす

15　同上、14頁。
16　同上、15～16頁。

る増子に、宮城女学校でこそ学び得た「愛のある知性」を見ることができるだろう。

5. 栗村道「小さい私の十字架」

次に、第 2 号の文苑に寄稿されたエッセイを見ていきたい。高等女学科 4 年生の栗村道（以下、栗村）は、ひょんなことから盗難事件の犯人とされてしまうのである。以下、その顛末をかいつまんで記述しよう。

試験前のある冬の日、髪を洗うことで 100 点が取れるというクラスメートの他愛もない雑談をよりどころに、洗髪に行った栗村が、洗い終わって髪を拭いていると、M さんがお金がなくなったと叫んだ。探しても見つからず、その夜に先生も交えた会合があり、そこで栗村が事件当時その場所にいたことを明言すると、栗村 1 人だけが洗面所にいたことになってしまった。あらぬ疑いをかけられた栗村は、3 日間食事も喉を通らない思いで、試験どころではなくなってしまった。クラスで事件のことを話すと、同情や理解を得ることができたが、疑いが晴れないので、先生の部屋に駆け込んだ。先生は同情してくれたが、クラスで話題になるたびに悲しくなり、とうとう倒れそうになった[17]。

事件に関する回想はここまでで、その後どのように解決したのかは記されていない。しかし、注目したいのは、この事件を振り返ったときの栗村の述懐である。以下、全文を引用しよう[18]。

> 暫くして元の自分にかへつた時この問題を再び考へた私が嫌疑の候補者になつた原因……そしてその戰況は極めて不安定な位置を占めて居つた事……して結果はどうなるだらう。私はこの問題の前に輕視されその上物質上の豐かでないので尙更深くこの破目に落ち入つた事を悲しく思ふ。けれど又一方に於て疑ひ得られる人間であるといふ事を思つた時に自分が如何に缺點の多いかを思つた。そしてこれが一つの尊い賜であると信じこの問題に對して誰をも憎むまい。
>
> けれど自分に取つてはあまりに重すぎる荷だつた私はこの重荷の前に恐れ戰いた。けれど是が或意味に於ける十字架ではないだらうか。
>
> 私はキリストのあの十字架をおもひ祈りながら聖進しやう。そしてこの問題の前にも……

些細なゲン担ぎがもたらした思いもよらない不運。考えようによっては、自暴自棄になり、人間不信に陥ってもおかしくないほどのこの苦難にあって、最終的に栗村は、人を憎むどころか、自分を振り返り、相手の立場に立って考え、理解し赦すことで、これを乗り

[17] 同上、27 ～ 29 頁。
[18] 同上、29 頁。

越えた。奇しくも前節の増子の示した愛を、栗村は実践したということになる。このエピソードもまた、宮城女学校の生徒が育んだ「愛のある知性」の 1 つとして、我々の記憶にとどめておくべきものであろう。

6. TW「小さな反逆者のノートから」

最後に、第 3 号に寄稿されたエッセイを取り上げる。その尖ったタイトルからも想像できるように、この作品は厭世的な言辞に満ちているが、しかし著者なりの鋭い眼差しを見出すことができるものである。まずは冒頭の一文を見てみよう[19]。

> 私は幸福さうに歌つて居る若い雲雀さん達に前からこう云ひたかつた、「眞の瞳を開いて私共の目の前に擴がつて居る不思議な世界を御覽なさい」と。

幸福はまやかしだと言わんばかりに「眞の瞳を開く」ことを勧める TW は、一見、大衆を諭す超越者を気取っている風である。だが、少し読み進めると、必ずしもそうではないことがわかる[20]。

> 何と云つても若い者達が輝かしい理想に醉ひながら人世の旅に一歩踏み出すが最後、餘りにも怖ろしい裏面を見せつけられ淨い魂を踏みにぢられた瞬間程痛々しい事はない。學校では決して眞實の目を開いてくれ樣とはしない、そして又社會は初心な若い者に接するのに厚い假面を以つてして居る。
>
> 利口な、美しい、立派な、体さいの良い表皮で厚く內側の只一つの醜い欲望を包み蔭して居ながら自動車に乘つて人々の間を驅け廻りながら平等だの、愛だのつて說き廻つて居る人々よ、何と都合好く人間は出來て居る。
>
> 若い人の多くはただ一歩で悲哀のどん庭へ落ち込み或は呪と恨みに自分の身も心も燒盡して仕舞ふのだ。

冒頭の「雲雀さん達」とはさしずめ生徒たちのことであろうが、彼女らに対して、思い描く理想が現実とは程遠いこと、それを理解しておかないとショックを受けてしまうだろうことを警告したものであると考えられる。TW が何を経験したのかは知る由もないが、自分が思い知らされた醜い現実を友と共有したい、というところだろうか。

しかし、TW はそこでただ長い物には巻かれよと「現実」にうまく対応することを提言しているわけではない。現実の欺瞞を暴き出しつつも、真の幸福への道筋を考えることを

---

19 『橄欖』3（1923 年 6 月）、24 頁。
20 同上。

忘れていない[21]。

> 眞の幸福を！と宣傳する前にお互に假面をはぎ取るがいゝ。人道を人々の前に說く前に自分の心を振り返つて見るがいゝ、其の人達は人道を敎へやうとして矢張り假面の作り方を敎へて居るも同樣だ此の世で人々が、昔のエデンの園のアダムとエバの樣に赤裸々の人間とならぬ限り眞の幸福は見出されるものではない。
>
> （中略）
>
> 成程、或る程度まで地位や黃金は非常に價値がある事もある。而しそんな物を賴らねばならない人々を世間では何とも思はない、（中略）それ等を見ると私は却つて此の世間の隅つこで誰にも知られずに此の大きな人世の苦痛と戰ひながら涙の代りに微笑して死んで行く小さな人間に、親しさを感じ又人間味を感ずる。

こうした主張はやや抽象的であり、それだけに自称「反逆者」としてはありきたりな感が否めないが、宮城女学校で学んだであろうキリスト教の知識や精神が発露されていることは間違いない。なお、これ以外にも TW は、「多くの人は自分よりも弱い者に對して常に暴君である。」[22] と喝破し、「誰が幸福であり得ようか。此の地上に於て。」[23] と絶望を見せながらも、最後には「而し私は只未來を信じたい、此の世に於て充たされない物が未知の彼處で見出される事を信じたい。」[24] と希望をもって筆を擱く。

以上のような姿勢に、真の幸福を問い続け、小さく弱い人間に共感を抱くという、「愛のある知性」を読み取ることができるだろう。

おわりに

本稿では、『橄欖』に投稿された様々な作品のなかから、「愛のある知性」を感じさせるものを選び出し、これを論評した。「文学少女」という存在が一定の憧れを集めていた大正時代[25]であればこそ、こうした文筆活動を通じて自らの思想を表現することがある種のステータスとして求められており、それに対応した表現技法を発展させていたという側面はあるかもしれない。しかし、仮にそうであったとしても、10 代後半頃と推定される生徒たちが、自己や他者に対してこれほどの考察を行い、自らの意見を述べられていたことについては、率直に驚きを禁じ得ない。そして、これは第一義的にはもちろん執筆者それぞれの資質によるものではあるが、随所に表出されている「神を畏れ、隣人を愛する」キ

---

21 同上、25 ～ 26 頁。
22 同上、26 頁。
23 同上。
24 同上。
25 時代背景については、たとえば、稲垣恭子『女学校と女学生』（中央公論新社、2007 年 2 月）などに詳しい。

リスト教精神、文学や芸術に対する理解や情熱など――即ち「愛のある知性」――は、宮城女学校でこそ豊かに育まれ、開花したものであるということも、また十分に示されているのではないか。

なお、今回取り上げた作品はすべて『橄欖』初期のものに限られており、そういう意味では「愛のある知性」を宮城学院に通底する教育理念として確認するという目的は、十分に果たせたとは言えないかもしれない。個人的には、生徒たちの自主性に富む『橄欖』初期[26]に対する思い入れもあり、このような選定になったが、今後機会があれば、他の時期の作品についても考察をしていきたい。

（こはだ せいじ / 宮城学院女子大学一般教育部教授）

[26] 『橄欖』初期の特異な性質については、小羽田誠治「『橄欖』成立の歴史とそこに見る生徒の「自主」」（『宮城学院資料室年報』27、2022 年 3 月）を参照されたい。

宮城女学校の戦時期学籍簿の検討
―出身小学校の地域と保護者の職業―

佐藤亜紀

はじめに

昨年度の『資料室年報』第 27 号では、中高倉庫から見つけ出された 5 冊の学籍簿の中から「1943（昭和 18）年度卒業生」に焦点を当て、学籍簿データ・出身小学校・成績表・卒業後の進路について報告した。特に、「卒業後の状況欄」については、宮城女学校から「学校挺身隊」に参加した人数で新しい発見があった。これまで、聴き取り調査の結果や写真等から、「本校から 1 月に学校挺身隊に参加した人数は、16 人である」とされてきた。しかし、当時の担任が書いた「卒業後の状況欄」から、「本校の学校挺身隊は 30 人（1 月入隊 29 人、3 月入隊 1 人）である」ということがわかった。

昨年度は、戦時中の学校生活、卒業後の進路といった生徒たちの「入学後」に着目したが、今年度は、生徒たちの「入学前」に焦点を当て、1937（昭和 12）年から 1941（昭和 16）年に宮城女学校に入学した生徒の実像に迫ることを目標とする。方法として、学籍簿の中の、「入学前の学歴」欄から出身小学校の地域と、「族籍職業」欄から保護者の職業について検討を行うこととする。

1. 学籍簿の概要

昨年度は、「1943（昭和 18）年度卒業生」という一つの学年だけを取り上げたので、簿冊名称そのままで表記した。しかし今回は、学籍簿 5 冊を比較し、主に入学当時に焦点を当てるため、わかりやすく、新たな「呼び名」を加えることにする。「呼び名」は和暦の入学年度に基づき、小学校の学籍簿にならって「S12 年次生」（昭和 12 年 4 月入学生）などとする。表 1 は、学籍簿 5 冊について、本稿での呼び名・入学年月・卒業年月・在籍生徒数・簿冊名称を記したものである。

表1

	呼び名	入学年月	卒業年月	在籍 生徒数（人）	簿冊名称
①	S12年次生	1937（昭和12）年 4月	1942（昭和17）年 3月	42	1941（昭和16）年度 卒業生
②	S13年次生	1938（昭和13）年 4月	1943（昭和18）年 3月	50	1942（昭和17）年度 卒業生
③	S14年次生	1939（昭和14）年 4月	1944（昭和19）年 3月	92	1943（昭和18）年度 卒業生
④	S15年次生	1940（昭和15）年 4月	1945（昭和20）年 3月	43	1944（昭和19）年度 卒業生 五年生
⑤	S16年次生	1941（昭和16）年 4月	1945（昭和20）年 3月	189	1944（昭和19）年度 卒業生 四年生

在籍生徒数を見てみると、年々増えていることがわかるだろう。① S12 年次生と比べて、③ S14 年次生は 2 倍以上、⑤ S16 年次生になると 4 倍以上になっている。この時代、徐々に募集生徒数を増やすには、大きな理由があった。宮城女学校は、創立以来、合衆国改革派教会からの援助を受け、キリスト教主義女子教育を行ってきた。すなわち、運営資金、宣教師派遣など、経営主体を合衆国改革派教会の外国伝道局に負っていたのである。しかし、日中戦争の長期化の影響で、その関係が難しくなっていく。

宮城女学校も加盟していた「基督教教育同盟校会」は、1940（昭和 15）年 9 月 6 日、青山学院で「加盟学校校長会」を開催し、「申し合わせ」を行った（『キリスト教学校教育同盟百年史 資料編』2012 年、160 頁～ 164 頁）。「申し合わせ」の内容は、以下の通りである。

1. 学校長、学部長、科長等は日本人たる事
2. 学校経営主体は財団法人たる事
3. 財団法人理事の過半数は日本人たる事
4. 未だ財団法人たらざる学校の設立者は日本人たる事
5. 各学校は外国教会より経済の独立を期する事

宮城女学校も、9 月 12 日、クリーテ校長が辞任し、翌昭和 16 年には財団法人となった。そしてミッション（合衆国改革派教会外国伝道局）からの寄付を絶ち、学校運営を行うことになった。資金確保の方法が、生徒の募集人数を増加させることとなったのである。⑤ S16 年次生の急激な増加には、そのような理由があったのである。

こうした背景により、年々生徒数が増えているところ、④ S15 年次生の生徒数だけが、前年度の③ S14 年次生 92 人に比べて半分以下となっている。その理由をここで述べなければならない。昨年度の『資料室年報』第 27 号 64 頁でも触れたが、これは生徒数が減少

したのではなく、この学年の在籍生徒のうち、43 人分しか現在のところ学籍簿が発見されていないことによる。

④ S15 年次生が 4 年生に進級した 1943（昭和 18）年 4 月、「中等学校令」により宮城女学校は校名を宮城高等女学校に改め、さらに 5 年制から 4 年制へと修業年限を変えた。それによりこの学年の生徒たちには移行措置がとられ、翌年 3 月、(1) 4 年生で修了する、(2) 5 年生に進級する、(3) 専攻科に進学する、という 3 つの選択肢が示された（『戦時下の宮城学院』2002 年、8 頁）。すなわち、この 43 人とは、(2) 5 年生に進級した生徒であり、(1) と (3) を選択した生徒の学籍簿が見当たらないのである。(1) と (3) が何人いたのか、これまで把握できていなかったが、今回、同窓会名簿（『宮城学院同窓会会員名簿』2001 年、16 頁）を調査することで、人数を確定することができた。その結果、(1) 4 年生で修了した生徒 18 人、(2) 5 年生に進級した生徒 43 人、(3) 専攻科に進学した生徒 25 人、ということがわかった。④ S15 年次生の在籍生徒数は、合計 86 人であり、半分の 43 人分の学籍簿が現在も見当たらないのである。『河北新報』に掲載された宮城女学校の生徒募集広告（1940 年 2 月）によると、昭和 15 年度生徒募集人員は、80 人であったことからも、この 86 人という数字は確かな数字と考えてよいだろう。資料室は、今後もこの見当たらない学籍簿を探し続けなければならないと考えている。

2. 出身小学校の地域

① S12 年次生から⑤ S16 年次生の「出身小学校の地域」を、年次ごとに「仙台市内」「仙台市外」「県外」「転校（入学以降）」「無記載」に分け、図表（資料 1 ～ 7）で示した。

図表を見ると、出身小学校の地域は、④ S15 年次生（資料 4）以外は、「仙台市内」が圧倒的に多く 6 割～ 7 割を占め、次に「仙台市外」、「転校」、「県外」となった。それぞれの数値も、在籍生徒数が 50 人前後であった① S12・② S13 年次生と、在籍生徒数が 2 倍になった③ S14 年次生、さらには在籍生徒数が 4 倍になった⑤ S16 年次生を比べても、そう大きくは変わらなかった。

それでは、なぜ④ S15 年次生（資料 4）だけが違う様相となったのであろうか。その理由として、先ずこの学年だけ在籍生徒すべての学籍簿が無いことが挙げられる。前章で、④ S15 年次生の現存する学籍簿は、86 人中 43 人分で、その 43 人とは 5 年生で卒業した生徒の学籍簿であり、それ以外の生徒の学籍簿は見当たらないと述べた。同じ条件の下で比較できないのは、誠に残念なことである。

さらに④ S15 年次生（資料 4）に注目すると、「転校」の割合が 35%と非常に多い。転校生は、他の入学年でもある一定数はいるが、この年の多さには何か理由があるのではないかと推測される。そこで、④ S15 年次生の学籍簿をもう一度見てみると、転校して来た生徒達の学校名の横に、「疎開の為」と書かれてある生徒が多く、その多くは彼女たちが最高学年の昭和 19 年の時であった。⑤ S16 年次生の学籍簿でも同じ様であった。昭和

19 年度以前に転校して来た生徒もいるが、「父の転勤の為」や特に転校の理由が書いていないものが多い。図表では「転校」を、一まとめで表したため、転校して来た年度がわからない。そこで年度ごとの転校生の人数を明らかにするために、「転校生の推移」を表 2 に示した。

この結果、昭和 14 年度から年に数人ずつ転校生が存在し、昭和 17・18 年度から徐々に増え、昭和 19 年度が最も多いことがわかる。学籍簿によると、昭和 12 年度から昭和 18 年度の転校の理由は、親の転勤が主な理由であるようだ。転校の理由を書いてないのも、親の転勤として問題はないであろう。しかし、昭和 19 年度に限っては、転校してくる理由が異なるようだ。昭和 19 年度の転校生は、22 人である。学籍簿には、担任によりその理由を「疎開の為」と書いてある場合もあれば、書いてない場合もある。だが、昭和 19 年度途中に東京（1 人だけ名古屋）の学校から転校してきているのは、あきらかに疎開と考えて間違いないだろう。その結果、22 人中 21 人が疎開で転校して来たということになる。入学年次で言えば、④ S15 年次生では、転校生 15 人中 11 人（73%）、⑤ S16 年次生では、28 人中 10 人（36%）が疎開転校生であった（表 2 ④・⑤）。

学籍簿から、疎開転校生は、昭和 19 年度以外見当たらなかった[1]。このことは、戦時中の特色を最も表していることである一方、この年度独自の現象と言えよう。そこで、④ S15 年次生と⑤ S16 年次生から、疎開転校生を抜いた数でグラフを作ってみたのが、資料 5 と 7 である。資料 5 と 7 を見ると、転校生の割合も例年通りとなり、多少数値の差はあるが、他の年度と同じような様相となった。

以上のことから、昭和 12 年度から昭和 16 年度に宮城女学校に入学して来た生徒の出身小学校は、生徒数が 2 倍、4 倍に増えても、それほど変化がなかったということが言える。また、「転校生の推移」を表にしたことで、疎開してきた生徒数を知ることができたのも大きな収穫であった。

表 3 は、年度ごとに出身者が多かった小学校上位 5 校を示したものである。片平小学校、東二番丁小学校、上杉山小学校が常連校と言えよう。これらの小学校は、当時、宮城女学校があった東三番丁に近いということもあるが、次の章で述べる「保護者の職業」も関係してくるのではないかと思う。

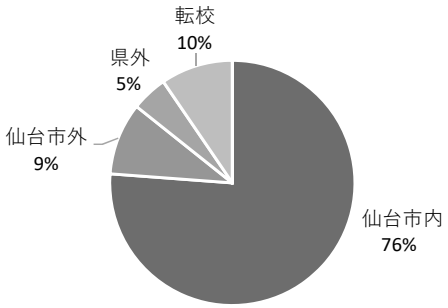
---

[1] アジア・太平洋戦争中、アメリカ軍による日本の初めて空襲は、1942（昭和 17）年 4 月 18 日、日本主要都市（東京・横須賀・横浜・名古屋・神戸等）へのいわゆるドーリットル空襲であった。アメリカ軍は、前年の真珠湾攻撃の復讐と連戦連勝に湧く日本国民の戦意喪失を目的としていた。首都・東京上空へ侵略を許したことは、日本中が大きな衝撃を受けた。
　これにより、昭和 17 年以降の本学への転校生の中にも、疎開による転校生もいた可能性もあるが、この学籍簿上では、昭和 19 年度の転校生しか「疎開転校生」は見当たらなかった。

出身小学校の地域

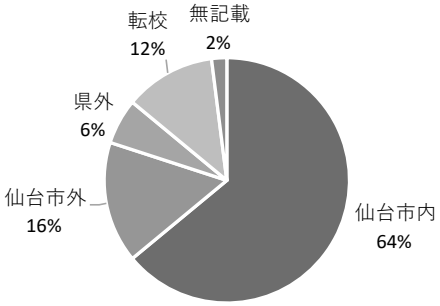
資料 1　S12 年次生

		人数	%
1	仙台市内	32	76%
2	仙台市外	4	9%
3	県外	2	5%
4	転校	4	10%
5	無記載	0	0%
	合計	42	100%



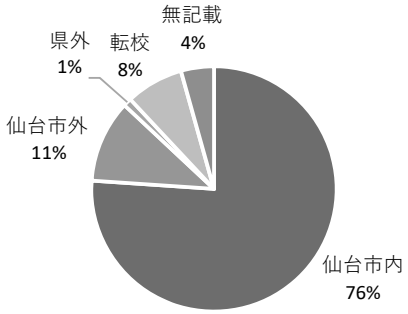
資料 2　S13 年次生

		人数	%
1	仙台市内	32	64%
2	仙台市外	8	16%
3	県外	3	6%
4	転校	6	12%
5	無記載	1	2%
	合計	50	100%



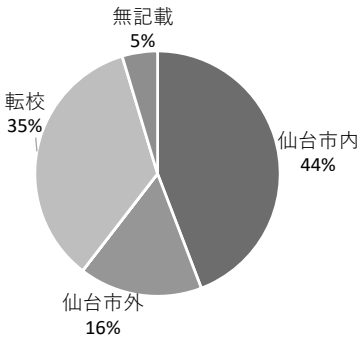
資料 3　S14 年次生

		人数	%
1	仙台市内	70	76%
2	仙台市外	10	11%
3	県外	1	1%
4	転校	7	8%
5	無記載	4	4%
	合計	92	100%



資料 4　S15 年次生

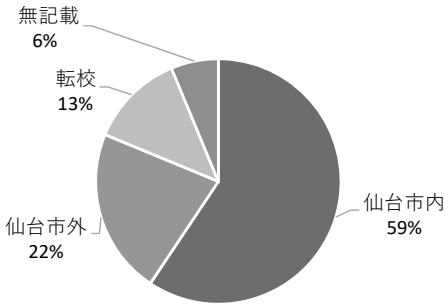
		人数	%
1	仙台市内	19	44%
2	仙台市外	7	16%
3	県外	0	0%
4	転校	15	35%
5	無記載	2	5%
	合計	43	100%



資料 5　S15 年次生（疎開生徒含めない）

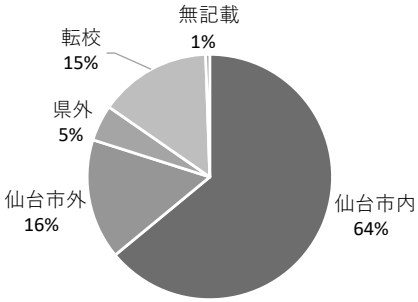
		人数	%
1	仙台市内	19	59%
2	仙台市外	7	22%
3	県外	0	0%
4	転校	4	13%
5	無記載	2	6%
	合計	32	100%

※疎開生徒11名



資料 6　S16 年次生

		人数	%
1	仙台市内	121	64%
2	仙台市外	30	16%
3	県外	9	5%
4	転校	28	15%
5	無記載	1	1%
	合計	189	100%



資料 7　S16 年次生（疎開生徒含めない）

		人数	%
1	仙台市内	121	68%
2	仙台市外	30	17%
3	県外	9	5%
4	転校	18	10%
5	無記載	1	1%
	合計	179	100%

※疎開生徒10名

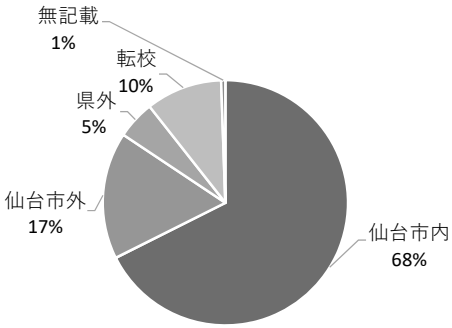


表2. 転校生の推移

（人）

	S12年度	S13年度	S14年度	S15年度	S16年度	S17年度	S18年度	S19年度	計
① S12年次生	0	0	1	2	1				4
② S13年次生		0	3	2	1	0			6
③ S14年次生			0	2	1	2	2		7
④ S15年次生				0	1	1	2	※① 11	15
⑤ S16年次生					0	10	7	※② 11	28
計	0	0	4	6	4	13	11	22	60
転校の理由	・親の転勤　・特に記入無し							※①の内訳は、疎開6人・19年度中に東京の学校からの転校5人 ※②の内訳は、疎開6人・19年度中に東京・名古屋の学校からの転校4人・父の転勤1人	

表3．出身者の多い小学校（仙台市内）

（人）

	1	2	3	4	5
①S12年次生	上杉山 9	片平丁 6	東二番丁 4	東六番丁・荒町 各3	宮師附属 2
②S13年次生	片平丁 8	榴岡 5	東二番丁 4	上杉山・宮師附属 各3	荒町 2
③S14年次生	連坊小路 13	片平丁 11	上杉山・榴岡 各9	東二番丁 5	東六番丁 4
④S15年次生	片平丁 5	東二番丁・連坊小路 各2	他、各校1人ずつ		
⑤S16年次生	片平丁 21	荒町 20	榴岡・連坊小路・東六番丁・原町 各8	東二番丁・上杉山 各7	立町 6

3. 保護者の職業

ここでは、① S12 年次生から⑤ S16 年次生の「保護者の職業」について見ていきたい。

「宮城（宮城学院のこと）に通っている生徒さんのお家は、ご商売をしている人が多い」と今でも耳にすることがある。おそらく、宮城県内での本校のイメージの一つであろう。果たして実際にはどうなのであろうか。昭和 12 年から昭和 16 年と 5 年間だけではあるが、当時、宮城女学校にはどのような職業の保護者を持った生徒たちが入学して来たのか分析することにする。「保護者の職業」として分類したのは、以下の通りである。

	内訳	具体的な職業
1	自営業	自ら事業を営み生計を立てている（商店・工場・〇〇業など）
2	会社員	会社員
3	官公吏	現在の国家公務員や地方公務員
4	農業	農業従事者
5	教授・教員	大学教授・助教・小中高教員
6	医者	医療従事者（薬剤師も含む）
7	牧師	牧師
8	軍関係者	軍関係者（退職軍人・元軍人も含む）
9	無職	無職・学生
10	無記載	記載が無かった

「保護者の職業」に関して分類した図表（資料 8 ～ 12）を見ると、上位 3 職種は、「自営業」「会社員」「官公吏」であった。「自営業」が最も多く 30％～ 40％を占め（S12 年次生だけ 22％）、「会社員」と「官公吏」は、毎年 20％前後であった。この上位 3 職種の数値を合算し、年度ごとに比較してみると、① S12 年次生 73%、② S13 年次生 66%、③ S14 年次生 81％、④ S15 年次生 79％、⑤ S16 年次生 77％となる。このことから、宮城女学校に通う生徒の保護者の代表的な職種はこの 3 職種であると言えよう。しかし、細かに見ていくと、② S13 年次生（資料 9）は、「自営業」「会社員」「官公吏」が、3 つとも 20％前後とほぼ同じ値であった。これに対し、⑤ S16 年次生（資料 12）は、「自営業」が「会社員」「官公吏」の 2 倍以上の値になり、それ以外の年度は、「自営業」と「会社員」「官公吏」の値は、平均して 10％の差であった。

次に、少数の職種を見てみよう。「農業」の割合は毎年ある一定数（2％～ 6％）あった。人数としては、416 人中 20 人と少ない。しかしながら、その 20 人の出身小学校を確認すると、70％（20 人中 14 人）が仙台市以外から通っている生徒であった。仙台市以外から宮城女学校に通う場合は、交通費の負担、さらに遠方の場合は、下宿費や宮城女学校の寄宿費の負担もある。そのことを考慮すれば、「農業」の生徒の家は、地方でも大きな農家と言っていいだろう。さらに、「教授・教員」「医者」という収入が高い職種も、毎年ある

一定数存在することから見ても、宮城女学校に通う生徒の保護者は、比較的、収入の安定した家庭が多かったと言えよう。一方で、「無職」の割合も、10%前後存在する。これは、学籍簿の族籍職業を書く欄の主体が親ではなく、戸主となっていることが関係していると思われる。当時は、戸主が祖父である場合も多かった。実際、今回の学籍簿の中にも、戸主が祖父で無職と書かれるケースが複数認められた。会社勤めをしていた人なら、退職している場合も多いであろう。「無職」にはそういう場合があることも付け加えたい。

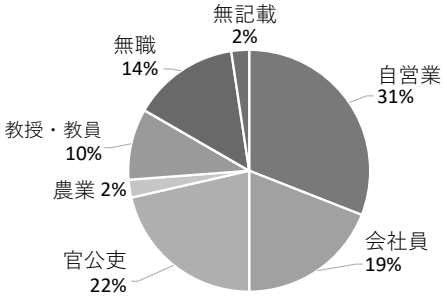
最後に、「牧師」「軍関係者」について見ていこう。② S13 年次生（資料 9）から④ S15 年次生（資料 11）には、「牧師」を職業とする保護者が 1 人、2 人いた。「牧師」という職業の保護者がいるのは、やはりミッションスクールならではのことであろう。しかし、⑤ S16 年次生（資料 12）には、「牧師」に代わって、全く異なる職種が台頭してきた。「軍関係者」である。この年は、宮城女学校が創立以来から援助を受けてきたアメリカのミッションボードとの関係を絶ち、日本人校長を据え財団法人となり、新しい体制をスタートさせた年であった。それ以前には見られなかった「軍関係者」を保護者に持つ生徒が 5%も入学して来たことは、この年度から宮城女学校が、日本人の運営になったことが、軍関係者の宮城女学校選択の道を開いたのではないかと思えてならない。

今回、① S12 年次生から⑤ S16 年次生 416 人分の学籍簿を調査し、宮城女学校に通う生徒の具体的な保護者の職業を知ることができた。分析を行う前は、「自営業」の割合が圧倒的に多いのではないかと思っていた。しかし、結果として、「自営業」よりも「会社員」「官公吏」を合算したいわゆるサラリーマンの方が、① S12 年次生から④ S15 年次生の保護者の職業として多く、宮城女学校から宮城高等女学校と校名を改め、生徒数を 4 倍に増やした⑤ S16 年次生だけが、サラリーマンより「自営業」が多いということが確認できた。「宮城に通う生徒のお家は、ご商売をしている人が多い」との風説が、実際に数として現実味を帯びてくるのは、昭和 16 年度以降のことだったのかもしれない。これを裏付けるためにも、今後、昭和 17 年度以降の入学生の学籍簿を見つけ出さなければならない。

保護者の職業

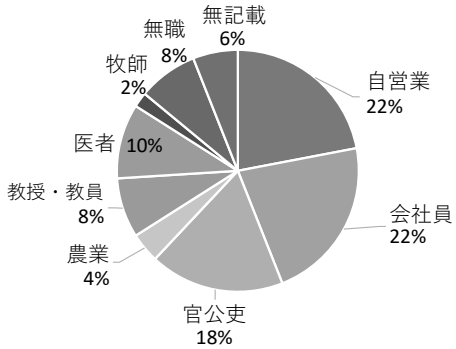
資料 8　S12 年次生

		人数	%
1	自営業	13	31%
2	会社員	8	19%
3	官公吏	9	22%
4	農業	1	2%
5	教授･教員	4	10%
6	医者	0	0%
7	牧師	0	0%
8	軍関係者	0	0%
9	無職	6	14%
10	無記載	1	2%
	合計	42	100%



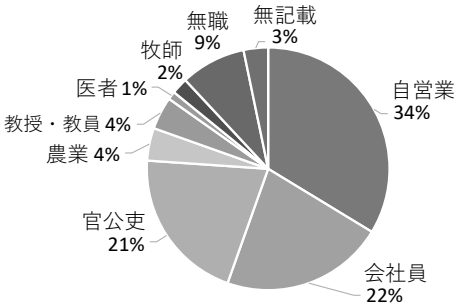
資料 9　S13 年次生

		人数	%
1	自営業	11	22%
2	会社員	11	22%
3	官公吏	9	18%
4	農業	2	4%
5	教授･教員	4	8%
6	医者	5	10%
7	牧師	1	2%
8	軍関係者	0	0%
9	無職	4	8%
10	無記載	3	6%
	合計	50	100%



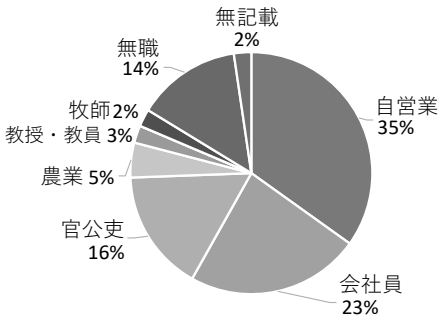
資料 10　S14 年次生

		人数	%
1	自営業	31	34%
2	会社員	20	22%
3	官公吏	19	21%
4	農業	4	4%
5	教授･教員	4	4%
6	医者(薬剤師)	1	1%
7	牧師	2	2%
8	軍関係者	0	0%
9	無職	8	9%
10	無記載	3	3%
	合計	92	100%



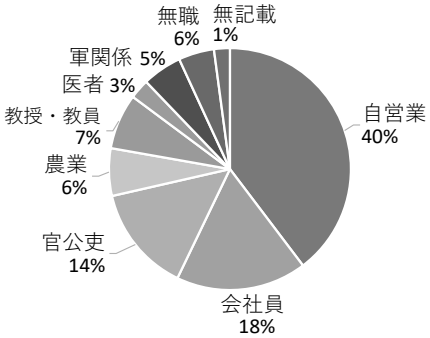
資料 11　S15 年次生

		人数	%
1	自営業	15	35%
2	会社員	10	23%
3	官公吏	7	16%
4	農業	2	5%
5	教授・教員	1	3%
6	医者	0	0%
7	牧師	1	2%
8	軍関係者	0	0%
9	無職	6	14%
10	無記載	1	2%
	合計	43	100%



資料 12　S16 年次生

		人数	%
1	自営業	75	40%
2	会社員	33	18%
3	官公吏	27	14%
4	農業	12	6%
5	教授・教員	14	7%
6	医者	5	3%
7	牧師	0	0%
8	軍関係者	10	5%
9	無職	11	6%
10	無記載	2	1%
	合計	189	100%



4. 今後の課題

今年度は、1937（昭和 12）年から 1941（昭和 16）年に入学した生徒の学籍簿から、出身小学校の地域と保護者の職業について分析を試みた。これにより、この時期に入学して来た宮城女学校生の実像に少しだが迫ることができたのではないかと思う。

当初は、1937（昭和 12）年から 1941（昭和 16）年の学籍簿の記載内容を、本稿で併せて紹介することを検討していた。学籍簿は、宮城女学校で生徒一人一人が学んだ過程を証明する原簿であり、今後、宮城学院の歴史をより豊かに描くための歴史資料となるべきものであるからだ。一方、学籍簿には、高度な個人情報も多く、その提示方法について十分検討しなければならないことが多々あった。そのため、今年度は、その利用の可能性の一端を示すにとどめ、次年度、本資料を広く利用していただけるような基礎資料として提示することを課題とする。また、見当たらない④ S15 年次生半分の学籍簿や、S17 年次生以降の学籍簿も引き続き探し続けたい。今後も埋もれている資料を探し、一つ一つを明らかにし、「宮城学院の歴史」に、新たな一ページを加えられるよう努力していきたい。

（さとう　あき / 宮城学院資料室職員）

大正期の宮城女学生たち
―清水アイさんご家族ご寄贈写真から―

佐藤亜紀

はじめに

2021 年 7 月、資料室に 1 本の電話があった。「先日、母の遺品を管理していた姉が亡くなり、その整理をしていたら、母の宮城女学校生時代の写真が出てきたので寄贈したい」とのことであった。お母さまのお名前を伺い、同窓会名簿で確認したところ、第 30 回生の清水アイさん（旧姓佐藤）であった。数日後、写真を届けに来校されたご家族様から伺ったお話も含めて、清水アイさんについて紹介したい。

アイさんは、1903（明治 36）年に生まれ、1917（大正 6）年に宮城女学校高等女学科に入学、1922（大正 11）年 3 月に卒業し、同 4 月、宮城女学校音楽専攻科に入学、1925（大正 14）年 3 月に同専攻科を卒業する。在学中は、宮城女学校女子青年会に所属し、卒業後は、音楽専攻科の教員として、子育てを両立させながら、1943（昭和 18）年まで本校で勤務した。退職後は、仙台市立長町中学校や仙台商業高等学校で講師として音楽を教えた。荒町教会や東六番丁教会に所属し、オルガニストとして奉仕した。

ご寄贈いただいた写真は、保存状態も非常に良く、何よりも幾つかの写真には裏書があり、撮影された年月日や人物名を特定することができる点で重要であった。特に、アイさんが所属していた女子青年会メンバーを写した集合写真には、アイさんの 1 学年下の土井照（土井晩翠氏長女）、1 学年上の畠山千代子（『隻手への挽歌』著者）という、大正期の本校を代表する生徒 2 人が写っており、裏書に名前も記されていた点が注目される。そのほか、創立 40 周年記念運動会の様子や専攻科の先生方など、資料室に所蔵されていない写真も多々あった。写真のほかに、アイさんご自身の成績表もご提供いただいた。大正期の音楽専攻科の成績表は、そもそも発行部数が少なかったこともあり、本校にとって貴重な資料である。当時の音楽専攻科で行われていた授業科目を知ることができ、本学の音楽教育の歩みを知る手がかりとなろう。

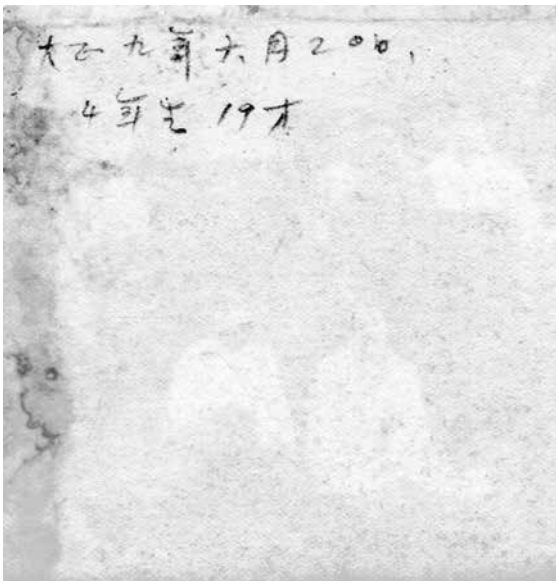
この度、資料室では、ご家族様に資料掲載の許可を頂き、写真とその裏書、若干の解説も加え、本号で紹介することとした。最後に、「写真をどうぞご活用ください」と、資料掲載をご快諾くださり、お母さまの思い出の詰まった写真をご寄贈くださったアイさんのご家族様に心より感謝を申し上げます。

～集合写真から～

①

宮城女学校4年生のアイさん（後列右端）

（裏書）

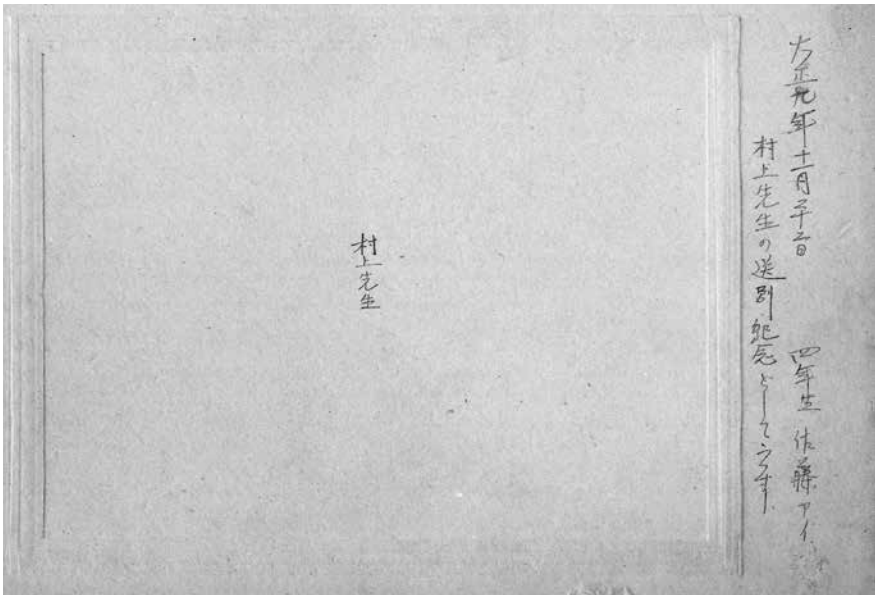


大正九年六月20日、4年生　19才

②

村上 兵助先生（後列中央）

（裏書）



大正九年十一月二十二日　村上先生の送別紀念としてうつす　四年生　佐藤アイ

③

アイさん（前列左から3番目）、C・L・ナウ先生（後列中央）、
土井 照（後列左端）、畠山千代子（後列右端）

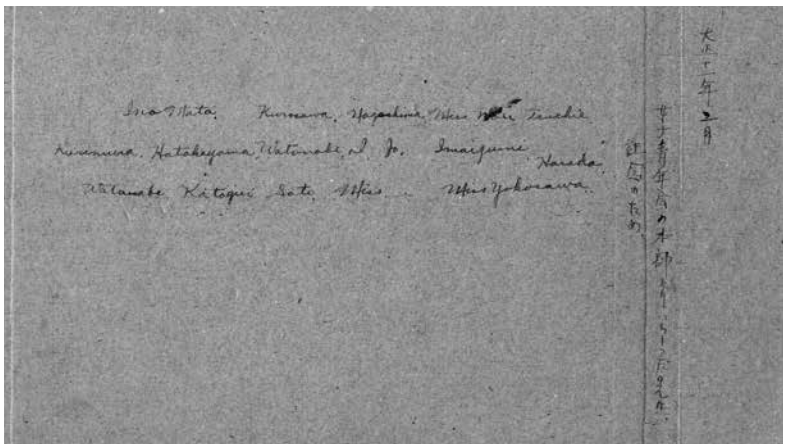
（裏書）

大正十年三月二十日　女子青年会委員
（氏名あり）

④

畠山千代子（2列目左から2番目）、アイさん（2列目中央メガネをかけ横向き）
土井 照（3列目右端）

（裏書）

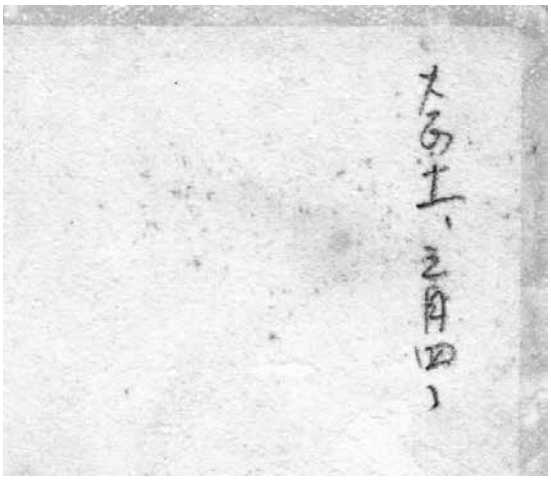


大正十一年三月　女子青年会の本部よりいらした先生記念のため
（ローマ字で氏名あり）

⑤

アイさん（後列中央）

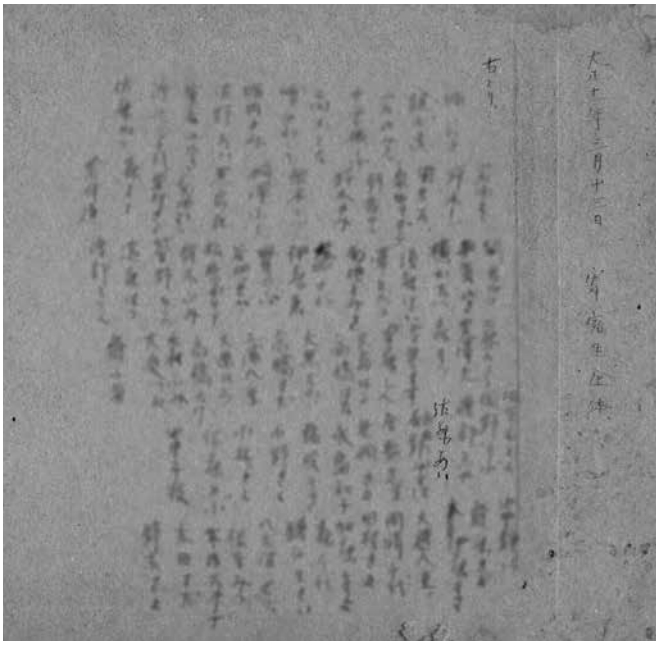
（裏書）



大正十一、三月四日

⑥

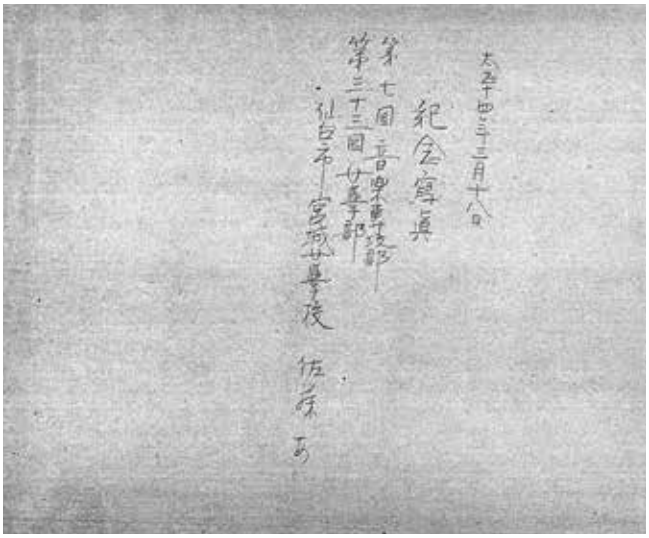
（裏書）



大正十一年三月十三日　寄宿生　全体
（寄宿生氏名あり）

⑦

（裏書）



大正十四年三月十八日
紀念写真
第七回音楽専攻部
第三十三回女学部
仙台市　宮城女学校
佐藤あい

～創立四十周年記念運動会から～

⑧

大正十五年創立四十周年運動会「運命競争」

⑨

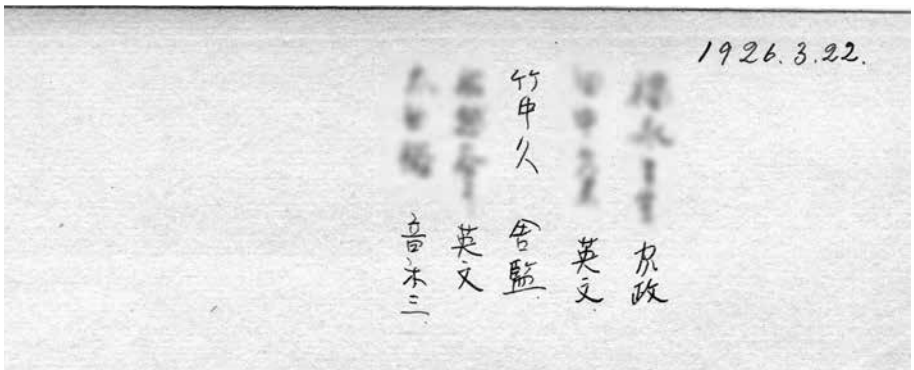
大正十五年創立四十周年運動会「生存競争」

～大正期の宮城女学校の先生たち～

⑩

竹中 久舎監（写真中央）

（裏書）



1926. 3.22　竹中 久舎監　（専攻科生徒の氏名あり）

⑪

ファウスト校長（2列目中央）、右隣にはハンセン先生

⑫

ファウスト校長（前列中央）

⑬

ケイト・I・ハンセン

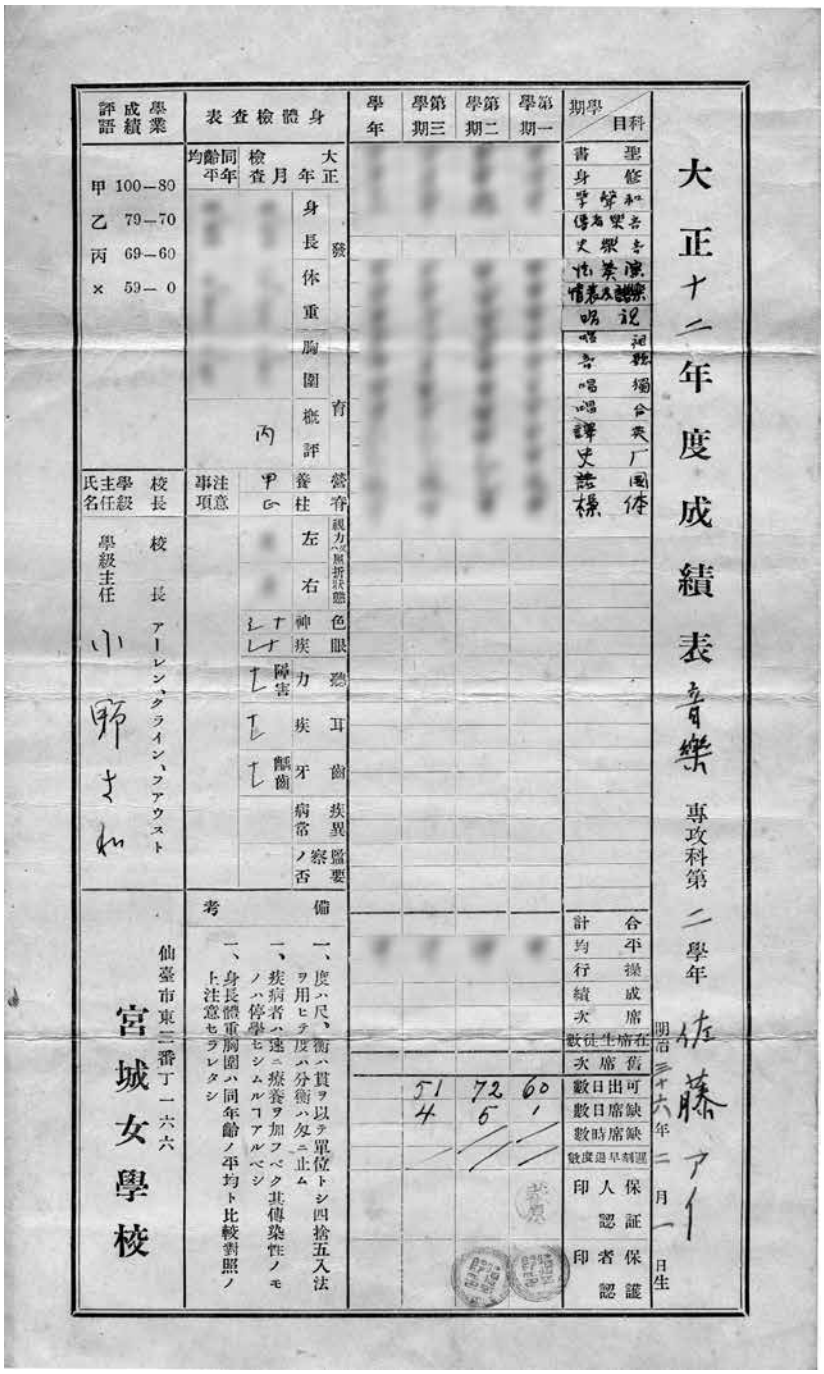
⑭

氏名不明

⑮

マーリー・V・ホファインズ（後列左から2番目）
カザリン・B・デシャン（前列左）
メリー・E・シュネーダー（前列右）

⑯



大正十二年度成績表音樂　專攻科第二學年

佐藤アイ　明治三十六年二月一日生

學期 / 科目	第一學期	第二學期	第三學期	學年
聖書				
修身				
教育				
國語				
歴史				
地理				
理科				
數學				
圖畫				
唱歌				
合奏				
獨唱				
合唱				
樂譜				
樂史				
樂理				
體操				
計				
平均				
操行				
成績				
席次				
在席生徒數				
舊席次				
可出席日數	60	72	51	
缺席日數	1	5	4	
缺席時數				
遲刻早退度數				
保証人認印				
保護者認印				

身體檢査表

大正年	同年平均
檢査月	丙
身長	
体重	
胸圍	
概評	丙
營養	甲
脊柱	甲
視力（裸眼）左	
視力（裸眼）右	
色眼 神	ナシ
色眼 疾	ナシ
聽力 障害	ナシ
耳 疾	ナシ
齒 牙	ナシ
齒 齲	ナシ
疾病異常	
監察要否	

注意事項

學業成績評語

甲 100—80
乙 79—70
丙 69—60
× 59—0

學級主任　校長　アーレン、クライン、ファウスト

小野さわ

校長主任　校長

備考

一、度ハ尺、衡ハ貫ヲ以テ單位トシ四捨五入法ヲ用ヒテ度ハ分衡ハ匁ニ止ム

一、疾病者ハ速ニ療養ヲ加フベク其傳染性ノモノハ停學セシムルコアルベシ

一、身長體重胸圍ハ同年齢ノ平均ト比較對照ノ上注意セラレタシ

仙臺市東二番丁一六六
宮城女學校

大正十二年度音樂専攻科　成績表

①

（裏書）大正九年六月 20 日、4 年生　19 才

（解説）佐藤アイさん（後列右端）、1917（大正 6）年に宮城女学校高等女学科に入学。4 年生（満 19 歳）の時の写真。他の方々は氏名不明。

②

（裏書）大正九年十一月二十二日　村上先生の送別紀念としてうつす　四年生 佐藤アイ

（解説）翌 12 月に退職される村上兵助先生（1908 年 4 月～ 1920 年 12 月在職）を囲んで、送別記念として撮った写真。

③

（裏書）大正十年三月二十日　女子青年会委員　　（氏名あり）

（解説）アイさんは、当時、宮城女学校女子青年会に所属していた。顧問の C・L・ナウ（後列中央）を始め、写真に写る委員すべての氏名が記入されていた。

3 年生の土井照（後列左端）、英文専攻科 1 年生の畠山千代子（後列右端）の名前も見受けられた。この 2 人は、大正期に卒業した本校を代表する生徒であり、若干、説明を加える。

土井照は、土井晩翠の長女。晩翠は 1915（大正 4）年から 1924（大正 13）年まで、本校の英文専攻科に在職していた。2 才下の妹信も同じく本校に入学し、英文専攻科に進学している。照は、在学中、女子青年会役員を務め、文学会ではピアノを演奏し、「優等卒業及進級者」に選ばれるなど優秀な生徒であった。しかし、音楽専攻科 2 年生の時に病気のため休学し、闘病生活の末、20 代半ばで亡くなった。父親の晩翠は、照が亡くなった後、七ヶ浜の所有地をキャンプ場として本校へ寄贈し、娘照の記念として「心照荘」という碑石を建てた。

畠山千代子は、幼少期に右腕を切断し、そのため公立女学校から入学を断られた。失意の彼女に救いの手を差し伸べ、入学を許可したのがファウスト校長であった。千代子は、高等女学科卒業後は英文専攻科へ進学し、宣教師から熱心な指導を受ける。在学中、千代子もまた、女子青年会役員を務め、「文学会」のシェイクスピア劇「リア王」では主人公を演じている。卒業後は、弘前女学校（現弘前学院大学）へ英語教師として赴任し、この時に英国の詩人ウィリアム・エンプソンと知り合う。その後、手紙を介して、エンプソンは千代子の英詩を添削し、後の彼の詩集には、千代子の英詩数編が収められている。畠山千代子については、『資料室年報第 10 号』（2003 年度発行、59 頁～ 92 頁）を参照されたい。

④

（裏書）大正十一年三月　女子青年会の本部よりいらした先生記念のため
（ローマ字で氏名あり、ただし来校者氏名は「Miss」と書きかけて未記入）

（解説）女子青年会本部から来校された先生（前列右から 2 番目）とともに、第一校舎正面入口で撮った写真。女子青年会の活動は、活発に行われていた。

⑤

（裏書）大正十一、三月四日

（解説）高等女学科の卒業式を間近に控えたアイさん（後列中央）。後ろは第一校舎。

⑥

（裏書）大正十一年三月十三日　寄宿生全体（寄宿生氏名あり）

（解説）女学校時代を寄宿舎で過ごしたアイさん。竹中 久舎監（2 列目左から 8 番目）、他 81 名の寄宿生氏名が裏書きされていた。

⑦

（裏書）大正十四年三月十八日　紀念写真　第七回音楽専攻部　第三十三回女学部
仙台市　宮城女学校　佐藤あい

（解説）アイさん、音楽専攻科の卒業記念写真。1925（大正 14）年 3 月 18 日に行われた卒業式では、音楽専攻科 3 名、英文専攻科 10 名、家政専攻科 11 名、高等女学科 39 名が巣立っていった。後ろは第一校舎正面入り口。

⑧・⑨

（裏書）なし

（解説）1926（大正 15）年 10 月 21 日、宮城女学校創立 40 年を記念し、陸上運動会が行われた。
⑧は、高等女学科 5 年生による「運命競争」（障害物競走）
⑨は、専攻科生による「生存競争」（パン食い競争）
当時の体操着は、セーラーとブルマーであった。
『橄欖第 6 号』（1926 年、56 頁）に同じ写真が掲載されている。

⑩

（裏書）1926.3.22　竹中　久舎監　　（専攻科生徒の氏名あり）

（解説）竹中 久舎監（1914 年 4 月～ 1937 年 7 月在職）と 4 名の専攻科生徒たち。卒業式を終え、寄宿舎でお世話になった竹中舎監と記念に写真を撮ったのだろう。

アイさんは写っていない。

⑪・⑫

（裏書）なし

（解説）大正期の宮城女学校の先生たち

⑪ファウスト校長（2 列目中央）、その右隣がハンセン先生

⑫ファウスト校長（1 列目中央）

第 6 代校長アーレン・K・ファウスト（1913 年～ 1930 年在職）

校長として 17 年間在職し、専攻科の設置、第二校舎献堂など宮城女学校の発展期を支えた。日本語も達者で、学校教育のみならず、「日本結核予防協会」設立などの社会活動や貧民救済活動にも大変熱心であった。

⑬・⑭・⑮

（裏書）なし

（解説）専攻科の先生たち

⑬ケイト・Ｉ・ハンセン　（1907 年～ 1926 年在職：戦争中一時帰国）

宮城女学校に 40 年以上在職し、音楽専攻科創設に尽力した。五音音階しか知らなかった生徒たちに七音音階を教授し、大正時代からソルフェージュを取り入れるなど、本学の音楽教育を通して日本の音楽教育の進歩発展に貢献した。『資料室年報第 23 号』（2017 年度）を参照されたい。

⑭氏名不明

⑮マーリー・Ｖ・ホファインズ（1923 年～ 1926 年在職）声楽担当

カザリン・Ｂ・デシャン（1924 年～ 1929 年在職）英語担当

メリー・Ｅ・シュネーダー（1913 年～ 1934 年在職）音楽科科長

メリーは、東北学院第 2 代院長デビット・Ｂ・シュネーダーの長女。生徒たちから親しまれていたメリーだったが、在職中、病気のため、44 歳で亡くなった。

⑯

（解説）大正十二年度 音楽専攻科成績表

大正期の専攻科成績表は、そもそも発行部数が少なかったこともあり、本学にとって貴重な資料である。

＜授業科目＞

聖書・修身・和声学・音楽者伝・音楽史・演奏法・楽譜及表情・視唱・聴唱

獨唱・合唱・英譯・歴史・国語・体操

＜成績表定＞

甲　100―80

乙　79―70

丙　69―60

×　59―0

＜校長＞　アーレン・クライン・ファウスト

＜学級主任＞　小野さわ

（さとう　あき / 宮城学院資料室職員）

□彙報
2022（令和 4）年度彙報

宮城学院資料室

資料の蒐集・受贈関係（2022年3月1日～2023年2月28日）
以下の資料受贈について感謝をもって報告いたします。（敬称略。冒頭の4桁数字は受贈・受領月日）

（1）定期刊行物関係

受領月日	刊行物名	発行元
0303	青淵　第876号　3月号	渋沢栄一記念財団
0309	國學院大學研究開発推進機構　機構ニュース	國學院大学
0309	第7回発表会　報告集	近代仙台研究会
0310	校史　Vol.32	國學院大學研究開発推進機構國學院大學
0328	東北大学史料館だより　No.36	東北大学学術資源研究公開センター史料館
0331	東北学院時報　第768号	学校法人東北学院
0331	東京大学　文書館ニュース　vol.68	東京大学文書館
0407	原阿佐緒記念館だより　第55号	原阿佐緒記念館
0408	青淵　第877号　4月号	渋沢栄一記念財団
0408	白金通信　No.510	明治学院大学
0510	青淵　第878号　5月号	渋沢栄一記念財団
0627	東北学院時報　第769号	学校法人　東北学院
0605	青淵　第879号　6月号	渋沢栄一記念財団
0705	白金通信　No.511	明治学院
0708	青淵　第880号　7月号	渋沢栄一記念財団
0809	東北学院時報　第770号	学校法人　東北学院
1007	青淵　第883号　10月号	渋沢栄一記念財団
1007	白金通信　No.512	明治学院
1007	東京大学文書館ニュース　Vol.69	東京大学文書館

1011	東北大学史料館だより　No.37	東北大学学術資源研究公開センター史料館
1011	東北学院時報　第771号	学校法人　東北学院
1011	原阿佐緒記念館だより　第56号	原阿佐緒記念館
1110	青淵　第884号　11月号	渋沢栄一記念財団
1129	東北学院時報　第772号	学校法人　東北学院
1129	東北学院同窓会報	東北学院同窓会
1205	白金通信　No.513	明治学院
1205	青淵　第885号 12月号	渋沢栄一記念財団
1220	キリスト教史学会報　第183号	キリスト教史学会
0105	青淵　第886号　1月号	渋沢栄一記念財団
0201	青淵　第887号　2月号	渋沢栄一記念財団
0202	東北学院時報　第773号	学校法人　東北学院

（2）書籍関係（紀要・年報・目録・図録を含む）

受領月日	刊行物名	発行元
0309	GCAS　Report　Vol.11	学習院大学大学院人文科学研究科　アーカイブズ学専攻
0310	軍用地政策の変遷	沖縄県公文書館
0310	立教学院史研究　第19号	立教大学　立教学院史資料センター
0328	フェリス女学院歴史資料館紀要　第74号	学校法人フェリス女学院
0328	東北学院史資料センター年報　Vol.7	東北学院史資料センター年報編集委員会
0328	東北大学史料館研究報告　第17号	東北大学史料館
0328	渋沢研究　第34号	渋沢史料館
0430	専修大学史紀要　第14号	専修大学　大学史料課
0430	学院史料　Vol.35	神戸女学院史料室
0430	明治学院歴史資料館資料集　第18集	明治学院歴史資料館
0430	早稲田大学史紀要　第53巻	早稲田大学大学史資料センター
0430	青山学院　近代史研究　第一号	青山学院史研究所
0510	立教学院史研究　第19号	立教大学　立教学院史資料センター

0510	フェリス女学院百五十年史　上巻	学校法人フェリス女学院
0520	明治大学140年小史	明治大学史資料センター
0520	大学史紀要　第28号	明治大学史資料センター
0801	成瀬記念館2022	日本女子大学成瀬記念館
1205	フェリス女学院150年史資料集　第6集	学校法人フェリス女学院
1205	大学認可100周年記念展『立教大学の誕生』	立教学院展示館

（3）受贈資料

受領月日	刊行物名	受贈者
0726	フェルディナンド・ミクラウツ自伝より1943-1952	田中弘志様

資料室運営委員会

委員長	佐々木哲夫	（宮城学院理事長・学院長）
委員	田中 弘志	（元宮城学院中学校・高等学校校長、前理事）
	長井 祥子	（元宮城学院同窓会会長）
	栗原　健	（宮城学院女子大学准教授）
	丸山　仁	（宮城学院中学校・高等学校教頭）
	伊藤 幸子	（宮城学院女子大学大学事務部庶務課）
陪席	本田 辰雄	（宮城学院事務局長）
資料室	佐藤 亜紀	（宮城学院事務嘱託職員）

宮城学院資料室年報『信・望・愛』2022年度 第28号

2023（令和5）年3月31日発行
編　集　宮城学院資料室/宮城学院資料室運営委員会
発　行　学校法人宮城学院
〒981-8557
宮城県仙台市青葉区桜ヶ丘9-1-1
電話　022-279-1311（代表）
022-279-7765（資料室直通）
E-mail　shiryoshitsu@mgu.ac.jp

印　刷　宮城学院生活協同組合
〒981-0961　仙台市青葉区桜ケ丘9-1-1
電話　022-278-1613